3月、台湾で1次リーグ（日・韓・クウェート・台）

モントリオール・アジア予選（男子）決まる

ＩＨＦ（国際ハンドボール連盟）は、昨年12月12日、キエフ（ソ連）で理事会を開き、宙に浮いていたモントリオール・オリンピック男子アジア地域予選の試合方式などについて協議。その結果、日本、韓国、クウェート、台湾の4ケ国が、まず3月15日から21日まで台湾（台北市）に集まり2回総当り、その勝者が3月28、30日（または4月1、4日）の両日、イスラエル（テルアビブの予定）でイスラエルと「アジア代表決定戦」（2試合）を行うことに決めた。

この決定は、世界女子選手権代表チームの団長をつとめて12月15日帰国した渡辺慶寿常務理事（技術部長）によって日本協会へ伝えられ、そのあと12月17日付でＩＨＦから公式文書も届いた。（＝本誌2頁参照）

日本協会・荒川清美理事長は「これがＩＨＦの最終決定」と判断し、12月24日のＪＯＣ（日本オリンピック委員会）総会で説明、承認をうけ、昨春4月以来、くすぶりつづけていた予選問題は、ようやくにして〝全面解決〟した。

日本協会は、ただちに代表（予選）チームの選衡日程など「予選突破」への準備に入った。クウェート、台湾との対戦は史上初である。

代表決定戦はイスラエルと

日本協会が10月以来、働きかけていた台湾への遠征と台湾との対戦をさけたい、とする要望が見送られた点からすれば、今回の決定は、必しも満足いくものではなかったが、荒川理事長は、渡辺（慶）常務理事から報告をうけた直後の記者会見で「これ以上反対しても混乱を招くだけ」との判断を示し、ＩＨＦ決議の受けいれを明らかにした。

もちろん、その裏には、ＪＯＣや日本体協との接触で、台湾への「遠征可能」を感じとっていたこともあるが、一昨年の男子世界選手権アジア予選以来、つねに日本協会が予選法式に注文をつづけ、ＩＨＦ側も、かなり〝アジアの事情〟をのみこんだことと、今回も9月、プレオリンピック（モントリオール市）で、荒川理事長がＩＨＦ事務総長Ｍ・リンケンバーガー氏（西ドイツ）と会談以来、2ケ月にわたって、ＩＨＦ筋が「日本の意向」を配慮してくれたことを荒川理事長なりに〝評価〟したものであろう。

アジア代表
- リーグ戦（3月15日～21日・台湾）：日本、韓国、クウェート、台湾
- （3月28日～30日又は4月1～4日イスラエル）：イスラエル

ＩＨＦ〝政治介入〟嫌う

ＩＨＦが、日本の働きかけを退けたのは、荒川理事長によれば「日本体協やＪＯＣが中国とどういう関係であれ、ＩＨＦの決めた予選法式を変更する決定的な理由にならない」といういつもながら〝政治介入〟を極度に嫌う姿勢が総てである。

ただ、昨年6月末の、予選開催地〆切り時点で、意思表示しなかった台湾に、4ケ国集結の一次リーグを引きうけるよう要請したのはＩＨＦと消息筋はみており、この間のいきさつは明確でない。

また、当初、一次リーグは日、韓、台の3ケ国参加と伝えられていたが、急きょクウェートが加わった。

この点について、リンケンバーガー事務総長は、荒川理事長に「クウェートの了解をとりつけている」と伝えてきている。

いずれにせよ、昨春4月、エントリー発表以来、イスラエルの立候補など、さまざまな曲折を経てようやく予選開催の見通しがたったことで、日本協会関係者は安堵している。

なお、日本協会は、今回は当初から予選会の誘致を行なわぬことに決めていた。

ＪＯＣ総会も承認

日本協会・荒川理事長（ＪＯＣ委員）は、12月24日、東京渋谷の岸記念体育会館で開かれたＪＯＣ総会で、ＩＨＦの示したモントリオール・オリンピック男子アジア予選の試合法式を報告、同総会の承認を得た。

ＪＯＣは「日中スポーツ交流に関する3原則」で、台湾で行われる国際大会には参加しない、などを申し合わせているが、「オリンピック予選は例外」との見解で認めたもの。

「ハンドボール」51年2月号（第138号）目次

【表紙写真】世界女子選手権予選リーグ・日本×ノルウェー戦（50年12月5日・ソ連ヴィルニウス市）＝全日本女子選手団提供

日本人審判員、初の〝国際進出〟

オリンピック予選(台湾)で3試合担当

日本協会は昨年12月24日、IHF(国際ハンドボール連盟)から、モントリオール・オリンピック男子アジア地域予選(日程)の公式文書(12月17日付)を受けとり、発表したが、同文書で、日本から審判員(ワンペア)が選出されたことも判った。

日本人審判員の国際舞台登用は日本ハンドボール界の永年の宿願。もやもやした空気に包まれていたアジア予選問題の最後で、思わぬ光明がさしこんだ印象である。

なお、アジア予選(1次ラウンド)で日本は、クウェート、台湾、韓国の順に対戦する。

クウェートからも一組

IHFからの連絡によると、アジア予選第1次ラウンドの審判は日本、西ドイツ(ファーク、ロスマニート組)クウェートの3ケ国から各一組が推せんされて全12試合の担当が決められるという。

このうち、日本組の割り当ては韓国×台湾1回戦(3月15日)、台湾×クウェート1回戦(17日)、クウェート×韓国2回戦(20日)の3試合と発表されている。

本誌〆切り(1月15日)までに、氏名の発表は行われていないが、現在、IHFのオフィシャル・ライセンスを交付されているのは安藤純光(日本協会審判部長、法大出)、佐野和夫(東京教大出)、岡前義春(日体大出)の3氏だけで当然このなかからワンペアが編成されることになる。

日本協会の悲願が成就

日本人審判員の〝国際進出〟は日本協会の悲願であった。

2年に1度開かれるIHF審判講習会への出席を恒例化し、いわゆる〝大本山〟とのパイプをつなぐ努力を重ね、5年前の秋、この分野の重鎮であるE・ホルレ氏(スイス、現IHF審判・規則委員会委員長)が来日した際には、当時国内で折紙つきの5ペア(10人)がデモンストレーションを行って見せるなどした。

しかし、なにごとも欧州中心の色彩が濃い国際ハンドボール界のなかでも、審判畑はとりわけその体質が強く、容易に門戸は開かれなかった。

日本協会の尽力はつづき、荒川清美理事長など、ホルレ氏と顔を合はせて「ところで話があるのだが…」と切り出しただけで、「判った、例の件だろう」と云われたホドだ、という。

待っていたチャンス

すべてを、ヨーロッパの目と手で管理しなければ気のすまぬIHFも、ミュンヘン・オリンピック(一九七二)を機に、少しづつグローバルな施策を打ち出しはじめ、48年4月、第5回世界女子選手権アジア予選・日本×韓国戦(東京、大阪で各1試合)の第1戦を日本側、第2戦を韓国側審判員で行うよう指示してきた。(=本誌106号参照)

予定どおり試合が行われていれば、この時が〝国際進出第1号〟になっていたわけだが、韓国の棄権で日本の不戦勝となり、流れてしまった。

その後、48年秋のユーゴ戦、49年秋の東ドイツ戦など、国内で開かれた公式戦の場を積極的に活用チャンス到来を待っていた。

使用球は「モルテン」か

苦節38年、栄光の扉をようやく開いた日本協会審判部の拡充は近年めざましいものがあり、執行各機関のなかで、国内ネットワークを、まっさきに完成させた部門でもある。

現在、発給されているライセンス(A~D級)の総数は、約600名と云われ、かって技術、総務、審判など一人何役も兼ねた時代から、安藤審判部長らの目指す「レフェリー・ソサイエティの確立」に向かって、着々と歩みを進めている。

今回のノミネートは、国内全レフェリーに、希望を与えるものでさらにステップして、世界選手権オリンピック(編集委注・モントリオールオリンピックには、日本人審判員は含まれていない)で、レフェリングできる日の近いことを示している。

なお、第1次予選のウィットネス(立ち合い人)はE・ホルレ氏

使用球は、昨春、IHF公認をとりつけた日本製「MTH3」(モルテンゴム工業製)になる模様。

決勝ラウンド(対イスラエル)については、すべて未発表である

公平を欠く組み合せだが

さて、審判界に対する〝朗報〟のため、焦点がずれたが、予選問題の解決は、心労が長く大きかっただけに、関係者は、一様にホッとした表情。

全日本男子・竹野奉昭監督は「必ず行われると判っていながら、具体的なことになると、まったく不明というのでは、選手の士気に影響してくる。これで落ち着いてトレーニングできる」と張り切っている。

それにしても、IHFは、思い切ったと云おうか、苦しまぎれにと云おうか、異例の組み合せで、事態を〝収拾〟したものである。

エントリー5ケ国のうち、イスラエルは、1カード(2試合)だけで、代表権を手にするかも知れないのだ(他の4ケ国は4カード)

公平を口ぐせのIHFにしてはめずらしいことで、日本協会のある役員は「最初の段階で、このような組み合せが発表されたら、猛反対しただろう」という。

また、別の役員は「日本の提案していたナックアウトシステムを退けてまで採用した案にしては策がない」と苦笑する。

意外なクウェートの参加

荒川理事長も12月15日の記者会見(東京)で「これ以上反対しても混乱をまねくだけ」と語り、不本意な受諾であることをにおわせている。

一日も早くメドをつけたい、という気持ちが、変則的な組み合せを、受けいれさせたと云え、IHFにしても、プレオリンピック(昨秋9月、モントリオール)の時

荒川理事長へ内示したアジア二分案を、あっさり捨てているのは解決を急いだからにほかならない。
　興味深いのは、日、韓、台のグループにクウェートが参加を「承諾した」(IHF文書)ことである。クウェートが台湾に乗りこみ、台湾と対戦するとは、日本協会筋はみていなかった。
　荒川理事長は「クウェートは、イスラエル以外ならどこにでも行くと云っていたのではないか」と推測しているが、1月14日、中国などによるアジア連盟(AHF)が結成されたこともあり、「なお波乱ぶくみ」とする消息通もいる。
　台湾協会が3ケ国を招いて主管を名乗りでたのは、意外とするムキが強いが「IHFは、台湾開催に自信をもっていた」(荒川理事長)。4月の(昨年)のエントリー〆切り後からなんらかの働きかけが行われていたのだろうか。
　しかし、昨夏8月、台湾に旅行した日本のハンドボール愛好者から本誌が聞いた話では、開催(予選誘致)の気配はまったく無かったとのことで、ここ二、三ケ月の間にまとまったのではないかとみられる。
　ちなみに、今回の予選は、航空費は全額参加国負担、滞在費(役員4、選手16以内)は台湾協会負担、レフェリー経費は4ケ国均等負担である。

楽観許せない代表権

　組み合せはともかく、台湾開催は、本誌136号既報のとおり、JOC(日本オリンピック委員会)、日本体協の「日中スポーツ交流三原則」がからみ、なりゆきが注目されていた。
　日本協会がIHFに対して申し入れた「台湾での開催及び台湾との対戦はさけて欲しい」とする要望は、すげなく却下されたが、JOC、日本体協の「オリンピック予選は特別のケース」という判断に救われた。
　昨秋4月以来、この問題で苦りきっていた荒川理事長(JOC委員)は、12月24日のJOC総会後ようやく表情をゆるめ、同日朝とどいたばかりの予選日程(=別掲)発表にまでこぎつけているが、この8ケ月間の苦労は、なみたいていのものではなかったようだ。
　なお、日本協会自身も、48年1月の全国評議員会、同理事会で、日中、日台との関係は「JOC、日本体協の意思尊重」と決議しているが「オリンピックなどの予選では、台湾との交流を拒むものではない」としており、問題ない。
　残る課題は、日本が、激しい予選を勝ち抜いてモントリオール行の切符を手にするか、どうかだ。
　若手中心の韓国、意欲的な台湾初登場ながら地力を秘めるというクウェート、打倒日本に手ぐすねひくイスラエル——。
　日本の優位不動とは云い切れぬ状勢である。

一難去ってまた一難　荒川理事長

□……「どうして、こうも問題がおおいかぶさってくるのだろう」——JOC総会(12月24日、体協)を終えて出て来た日本協会・荒川清美理事長は、さすがに疲れた表情だった。
　男子の"台湾行き"が、どうにか解決したと思えば、すぐあとに、女子のオリンピック予選(3大陸代表決定戦)が、6月28日からワシントンで開かれるため、日本選手団編成に支障をきたす、という難題が待ちかまえていたのだ
□……女子チームは、勝てばアメリカ大陸に居残り、そのままモントリオール入りの予定。
　そうなると、「往復利用」という規定の、日本選手団チャーター機を帰途に使うことができなくなり、航空費だけでも大変な支出。晴れのブレザーコートも、敗れれば自己負担という条件で採寸する"現実の冷めたさ"だ。
　繁雑な手続きを踏まねばならぬのなら「女子の参加認めず」という声も、JOC内部にはくすぶっていたとかで、荒川理事長は説得に大わらわ。
□……「なんとか、予選出場は認められそうだが、負けた場合、600万円の自己調達が必要」と荒川理事長は複雑な面持ち。とりあえずIHF(国際ハンドボール連盟)に、予選会期の繰りあげを打診するというが、変更の見通しは暗い

モントリオールオリンピック
男子アジア地域予選日程

◇…1次ラウンド…◇
=台湾=

▽第1日(3月15日)
日本——クウェート
韓国——台湾
▽第2日(16日)
日本——台湾
韓国——クウェート
▽第3日(17日)
日本——韓国
台湾——クウェート
～以上1回戦～
▽第4日(19日)
韓国——台湾
日本——クウェート
▽第5日(20日)
韓国——クウェート
日本——台湾
▽第6日(21日)
台湾——クウェート
日本——韓国
～以上2回戦～
(18日は休み)

◇…決勝ラウンド…◇
=イスラエル=

▽3月下旬または4月上旬(2試合)
イスラエル——1次ラウンド勝者

1月末にも代表決定か

　日本協会は、確定したアジア予選に出場の代表チーム選考について、1月24日の月例常務理事会(東京)で協議する。
　今のところリストアップは、19名の50年度ナショナルチームによる第7次強化合宿(2月12～18日・神戸)終了後とみられるが、竹野監督と東コーチは、第7次合宿から代表チーム一本を望んでおり第6次合宿(1月18～25日・名古屋)後の1月末に決定も考えられる。選手数は内規により14名。
　代表権獲得の場合、晴れのオリンピックチームの選考についてはいっさい白紙である。
　女子の3大陸代表決定戦(6月28～7月4日・ワシントン)の代表に関しては、日時に余裕があるため、具体的な動きは伝えられていないが、2月末に、オリンピック候補選手を発表し、そのなかから選ばれる公算が強い。
　なお、男女とも出場権を獲得した場合の役員・選手数は、1月28日東京で開かれるJOC(日本オリンピック委員会)総会でJOCにより決定される。
　1月13日付で一部の報道機関が伝えた「JOC内示」によれば、ハンドボールは役員3、選手24(男女各12)である。ミュンヘン(男子のみ)の際は役員1、選手11、補助役員1だった。

不屈の精神力養成へ

〜オリンピックイヤーを迎えて想う〜

竹野奉昭
（全日本男子監督）

初参加をはたしたミュンヘンオリンピックから早や4年。

オリンピックイヤーを前にして全日本男子チームは、その強化策の一環として昨年12月、全日本総合選手権直後の一週間、初の試みであるコーチングスタッフ（竹野東）と少数指定選手の合宿を神奈川県葉山の大崎電気寮で行った。

参加を指定した選手は19名のナショナルプレイヤーのうち僅か7名にすぎず、コーチと合せ9名が禁酒、禁煙を誓い、来るべき年に備えて心と体を徹底的に鍛えあおうとしたものである。

午前中は技術的なテーマのミーティング、午後は冬の海辺のランニング、そして夜はこれまでの主要国際試合のヴィデオ・テープを見ながら、各国選手の戦術研究と自分たちの動きの反省、個性を活かした連携プレーのディスカッションに費した。

特に、昨秋のプレオリンピックでは、それまでの8mm重用からヴィデオテープ一本にしぼった資料作成を試み、今回、選手たちの手によって写されたテープを試写してみて、その効果と、新たな斗志を抱くことができた。

全19選手のなかから数名をピックアップすることは、ある意味で冒険であったかもしれないが、ナショナルチームに属する各チームの選手が、〝単独チーム〟として行動する精神力をより強く養成するためには、こうした試みも必要と確信しての実行であった。予期した成果をあげ得たと思っている

機会をみて、別の7人なり10人なりを指定して、いっそうの強化を企りたいと考えている。

さて、モントリオールにおける日本の成否のカギを握っている課題の一つに「時差の克服」がある。

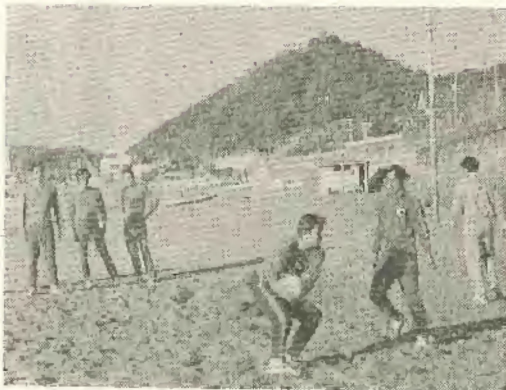
もちろん、その前に、アジア予選という大難関を突破しなければならぬが、これとても「時差」の問題はつきまとっている。

幸いにも、昨秋11月、伊豆修善寺のサイクルスポーツセンターで開かれた日本体協の第2回コーチ会議で、このテーマのリポートが行われた。

この会議は、日本体協、JOC（日本オリンピック委）共催、競技力向上委主管によるもので、各競技団体の強化担当スタッフ140名が参加、ハンドボール界からは私と東嘉伸コーチ（男子）が出席した。

地理的に恵れない日本のスポーツチームが、欧米で開かれる世界選手権、オリンピックの場に於いて、〝時差〟は常につきまとい、我々も、プレオリンピック参加で改めて時差の克服が、大きな宿題であることを痛感していたものである。

「時差ボケ」と一口に云っているが生体の生理機能は地球の自転に同調する、固有の時間のリズムを持っている、人間にように〝昼行性の動物〟は、昼間は活動期、夜間は休息期にあたる。



寒風の砂浜を舞台にした全日本男子初の「少数指定合宿」は，成果をあげた。

自律神経系の緊張、副腎皮質や甲状腺からの活動ホルモンは午前9〜10時に最高、夜間に向かって下向する。

体温、脈拍数、呼吸、血圧などを指標とする活動機能もこのリズムに合せて、聴幹において統御されている。この様な調整装置は、生体時計とよばれている。

航空機でモントリオールに飛ぶ場合には、環境と生活のリズムは時差によって十時間のズレがあるため、生理的不調として、昼間ねむけ、夜間のねつき不良、食欲不振、疲労感、精神機能の低下などがおこる。

ミュンヘンオリンピックでもそうであったように、ただでさえ精神的な重圧度の強い場へ出向くのに加えて、この時差の負担、さらにドーピング検査など、オリンピックに於ける心的な疲労はなみたいていではない。

ドーピング検査など、被検査選手のデータがととのえ終わるまで全員待機であり、その精神的、肉体的疲労は正直のところ、想像以上のものであった。

オリンピックという場は、諸々の条件、環境に屈することのない〝強い心〟と〝強い心〟の斗いの場ということができる。

私はナショナルプレイヤーにはなによりも不屈の精神力が必要である、と考えている。

葉山の合宿も、その養成が最大の狙いであったし、多くの読者には、あるいは関係のない話であるかもしれぬ〝時差〟の口説に紙数を使ったのも、ナショナルチームの周辺に取り巻く課題が、いかに大きく深いものであることを、ナショナルプレイヤーを含めて、諸賢に知っていただきたかったからだ。

もちろん、技術的にも、我々は多くのテーマをかかえている。

とりわけ「スピード」は、日本にとってヨーロッパの壁を突破する不可欠の条件だ。

全盛の東欧勢に切りこむ頭脳と技能を持ち合わせているのは、日本だけ、という自信がある。それには、スピードでの勝負の完成だ――走り、動きのスピード、パスキャッチ、シュートのスピード…

来月十五日からは、いよいよアジア予選である。

与えられたチャンスを活かすべく、選手、コーチともども最大の努力を払うことを、新年にあたりお約束したい。

「日本リーグ」(男女)今秋発足で準備

実業団以外にも参加の道開く

日本協会

「日本ハンドボールリーグ」(仮称)が、早ければ51年度下半期に発足する──日本協会は、昨年12月13日の月例常務理事会で、懸案の「日本リーグ」問題について、総務・企画委員会から提出された基本構想案の大筋を認め、2月に予定される全国代議員会、同理事会へ「日本リーグ運営委員会規程(案)」と「第1回実施要領(案)」を提案することになった。

各常務理事の合意をみた「日本リーグ基本構想」の要旨は次のとおりである。

①日本協会の新しい事業として「日本ハンドボールリーグ(仮称・男女)」を発足させる。

②第1回「日本リーグ」の開始は、51年度下半期を一応の目標に予定し、準備を進める。

③「日本リーグ」加盟チームは、初年度に限り日本協会が別に定めるランキングによって、男女とも候補チームをノミネート、そのうち、加盟意思のあるチームを、男女最高8チームまで選出する。

④「日本リーグ」の運営は、運営委員会を特別編成して行ない、既存の団体・組織とは別個のものとする(原則として独立採算制)

⑤日本協会の認定する年度ナショナル・チャンピオンチーム(男女)は、これまでどおり全日本総合選手権の勝者とする。

ハイペースの具体案作成

本誌既報のとおり、日本協会は11月の月例常務理事会で、それまで全日本実連のペースで運ばれてきた「日本リーグ」問題の主導権を握りとり、日本協会の新しい事業として、数年来にわたるこの問題を改めて検討する、という態度を明らかにした。

12月の月例常務理事会のなりゆきは、それだけに注目を集めていたものだが、実連サイドが「日本実業団リーグ(全日本実団選手権)を日本リーグとする」という当初の態度に、あまりこだわりを示さなかったこともあって、すんなりと「基本構想」がまとまった感じである。

もっとも、お膳立てした総務・企画委員会は、突然舞いこんだ話に、「日本リーグ」そのものの是非を論じる間もなく、いきなり実施プランを組み立てる作業に手をつけた、といわれる。

そうでなければ、昨年7月に口火が切られて以来、もたつきが目についていたこの問題が、こうもハイペースで〝解決〟はしなかっただろう。

学生チームも検討の余地?

基本構想のなかで目につくのは加盟チームを特定の分野に限定せず、発足にあたって「広く候補チームを推せんする」、「スタートの目標を51年度下半期に置いたこと」「独立採算制」の3点である。

加盟チームのノミネート法式(別掲)は、先発している他競技団体の日本リーグではみられなかった試みだ。

この発想は「日本リーグは、全国関係者の支持によって実施されなければならない」とする荒川清美理事長の考えに基くもので、企業チーム以外は参加できまい、とする声が圧倒的ななか、どのような結果が現れるか興味深い。

一つのカギとみられるのは、学生界の動向だが、12月の会議に陪席していた全日本学連・中沢重夫理事長は「日程と経済的条件が出揃ってみないと判らぬが、この両面に工夫があれば、学生チームがリーグ入りする余地はあろう」と語っており、また、あるクラブ関係者は「リーグ入りはとてもできないが、例え第4ランクでもリーグ発足にあたってノミネートされるようなら光栄だ」と、この法式に歓迎の意向を述べている。

初動段階では、荒川理事長の狙いは、充分な手ごたえがあったとみてよい。

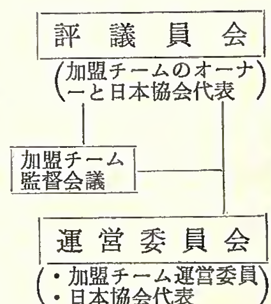
目標は「9月スタート」

問題はむしろスタート時期だ。目標におかれているのは、「9月」と伝えられ第1回リーグ(51年度)は、とりあえず1回総当り土、日曜に祝日を加えると10試合日を予定でき、男女合わせて56カード(最高数)の消化は可能だが、会場確保に不安が残される。

また、嶋田新太郎総務担当常務理事によれば、1月末日に全候補チームのリストアップを終え、2月下旬までに各チームに加盟意思を問い合わせ、3月下旬には正式加盟チームを発表したい、としているが、現在の進行状態では最低1カ月のズレはさけられない。

そうなると、9月スタートは難しくなり、10月国体、11月全日本学生、12月全日本総合とつづくため、来年1月説も出てくる。

◇日本リーグ運営委員会・案



(注)評議員会は当分の間日本協会代議員会が代行予定。

責任重い「運営委員長」

解決しなければならぬ課題は、ほかにも多い。

看板争いになりかねなかった全日本総合選手権との関連は、はっきりと一線を画し、手際のよさをみせたが、リーグ加盟チームを全日本総合選手権で、どう取り扱うかは、明確にされていない。

また、肝心の運営委員会の組織についても、青写真は出来あがっているものの(=別掲)人材の確保は、いっさいされていない。

現在の構想からすれば、運営委員長のポストは、各全国連盟理事長に匹敵する要職だし、対外的責任という点では、日本協会理事長に比肩する。

導火役を果した全日本実連に

も、新しい問題が生じる。
　日本リーグが、日本協会の新規事業となる以上、全日本実業団選手権を、どのような形態であれ存続させなければならないからだ。
　最近2年間のように各地転戦の「日本実業団リーグ」とした場合「日本リーグ」に加盟しているチームは、負担が増える。開催地にしても地方実連が未成熟なだけに、苦しみそうだ。

いっそう周到な準備を

　本誌への投書から推せば、地方の愛好家たちは、大きな期待を寄せている。
　早々と、試合誘致を検討しはじめた地方組織もある、と伝えられる。
　ちなみに、国内のスポーツ界で「日本リーグ」を実施しているのはサッカー、バレーボール（男、女）、バスケットボール（男、女）アイスホッケー、ソフトボール（女）、アメリカンフットボール（社会人）、ゴルフ（大学）、軟式テニス（実業団女子）の8競技で、バドミントンが計画中。各競技とも、それなりの評価を得て、実績をあげている。

日本ハンドボールリーグ（仮称）加盟チームノミネート（ランキング案）

	男　子（延77チーム）	女　子（延70チーム）
第1ランク	全日本総合①（大同製鋼） 〃　②（湧永薬品） 〃　③（本田技研鈴鹿） 〃　④（中大） 全日本実業団①（※大同製鋼）	全日本総合①（日本ビクター） 全日本実業団①（田村紡績） 〃　②（立石電機） 〃　③（※日本ビクター） 〃　④（ブラザー工業）
第2ランク	全日本学生①（※中大） 〃　②（大阪体大） 〃　③（日体大） 全日本教職員①（大阪イーグルス） 全日本実業団②（※湧永薬品） 〃　③（※本田技研鈴鹿） 〃　④（三景） 〃　⑤（大崎電気） 〃　⑥（三陽商会） 全日本総合予選2回戦敗者～4チーム～（※大阪イーグルス）（※大崎電気）（※三景）（※三陽商会）	全日本学生②（東京女子体大） 全日本総合②（※立石電機） 〃　③（東京重機工業） 全日本実業団⑤（※東京重機工業） 〃　⑥（大崎電気） 三重国体成年女子①（※田村紡績） 〃　②（※ブラザー工業）
第3ランク	全日本教職員②（オールドイーグルス） 〃　③（大阪教員ク） 全日本学生④（法大） 全日本実業団⑦（日新製鋼呉） 〃　⑧（三菱レイヨン大竹） 全日本実連推せん～2チーム～	全日本学生②（日体大） 〃　③（東京学芸大） 全日本総合④（※ブラザー工業） 〃　⑤（※大崎電気） 〃　⑥（※田村紡績） 全日本実連⑦（東北ムネカタ） 〃　⑧（日立栃木）
第4ランク	全日本自衛隊①（海上自衛隊下総） 全日本実連推せん～2チーム～ 全日本学連推せん～2チーム～ 47都道府県協会推せん（各県内最優秀チーム）	全日本実連推せん～2チーム～ 全日本学連推せん～2チーム 47都道府県協会推せん（各県内最優秀チーム）

※印はすでに上位ランクグにノミネートされていることを示す。

　ハンドボールも、新しい前進への布石となるよう充実した内容と堅実な運営が望まれ、そのためには〝決定〟後のこれからも、充分な検討、周到な準備、思い切った行動を企らねばならないだろう。
　なお、日本協会は、参加チームが正式決定した時点で、運営委員会を編成するが、それまでの事務取扱いは、総務・企画合同委員会のなかに準備委員会を設けて進めることを決めた。準備委員は1月24日の月例常務理事会で決まる。また、第4ランクの各都道府県協会による推せん〆切りは2月20日とされている。

「日本ハンドボールリーグ」加盟チームの選びかた
（常務理事会構想）

　別表のように、昭和50年度の主要大会を基準にして、第1ランクから第4ランクまで、男子延べ77チーム、女子延べ70チームをノミネート。
　全チームに対し、日本協会が加盟条件を添えて参加意思の確認を行う。
　参加意思を示したチームが、8チーム以内の場合は、そのまま発足となる。
　8チームを越した場合は、ランキングにより、上位から8チームを自動的に選ぶ。したがって、男女とも第1ランクにノミネートされた各チームは意思表示さえすれば、加盟が認められるわけだ。
　第1ランクの4チームと第2ランクの6チームが意思表示したような場合は、第2ランクの6チームから4チームを選ぶための「セレクションマッチ」を行って決める。逆に、加盟チームが男女とも4チーム以下になった場合は、今期の発足を見合すことが申し合はされている。
　なお、このシステムが採られるのは、初年度だけで、2年目以降については未定。
　第1回発足と同時に「2部リーグ」も設けて入れ替え戦制を採るか、各年度ごとに、新たな加盟希望チームによる大会を開き、その上位チームが入れ替え戦へ臨む、といったシステムが研究されている。

実連推せん、早くも決まる

　全日本実連は、日本協会（常務理事会）の示したランキングに基いて、第4ランク推せんチームとして、女子の豊田工機（愛知）、大和銀行（大阪）を決めた。
　男子は、2月8日から舞鶴で開く第7回全国実業団トーナメントの上位2チームを推せんする。
　また、全日本学連は2月22日の全国理事会（東京）で「日本リーグ問題」を協議する予定。

東ドイツ優勝、日本は10位に終わる

第6回世界女子選手権は，昨年12月2日から13日までソ連・キエフ市を主会場に世界各地の予選を勝ち抜いた12カ国が参加して開かれた。

アジア地域代表として5度目の出場をはたした日本は，若手の成長で，上位進出を期待されたが，オリンピック出場への最後の機会となるヨーロッパ勢に突き放され，結局，アメリカ，チュニジアをおさえての10位にとどまった。

ベストシックスによる決勝リーグは，史上特筆されるべき激戦となったが東ドイツが全勝，第4回（1971）以来2度目の栄冠を飾った。

第6回世界女子選手権（12月2～13日 ソ連・キエフ市）

予選リーグA組

日本（アジア地域代表、前回10位）の出場する予選リーグA組は、ヴィルニウス市にルーマニア（前回2位）、チェコスロバキア（6位）、ノルウエー（8位）が参加、12月2日から5日までの3日間にわたり行われた。

前半、手痛いミス繰り返す

日本の第1戦（遠征第8戦）・チェコスロバキアとの試合は、12月2日午後7時から行われた。審判＝リカルト、イシェル（スイス）、観衆＝約六千。

チェコ 21（11—10、10—3）13 日本

【チェコ・身長】		得
GK	マカラクコーワ・165cm	0
	ダティンスカ・175	0
FP	ボレドビコーバ・165	1
	マチソーバ・169	1
	アンギャローバ・165	0
	バスソーバ・164	3
	ミカルチコーバ・164	0
	ホラローバ・164	6
	クツコーバ・170	4
	ブルタコー・175	0
	ホルチノーバ・183	4
	ポラチコーバ・168	2
PT	（4）	21

【日本】		得
GK	和田	0
	久保	0
FP	古佐原	4
	島田	1
	蔵田	0
	額賀	0
	山下	2
	松下	4
	菊地	0
	河田	1
	穂積	0
	紀野	1
PT	（2）	13

後記　鈴木　義男

○……幻想的な素晴しい開会式の感動が尾を引きすぎたのか、日本の前半はあまりにも悪かった。

3、4分たてつづけにPT、バスソーバに決められて先行を許したあと、相手ミスからの速攻で島田が1点を返したまではよかったのだが、その後の好機をミスで逃しているうちに、傷口が拡がり、9分1—5となった。

10分PT（古佐原）、16分松下のロングで3—5とし、このあたり緊張がほぐれたかにみえたが、再び攻撃リズムが崩れ、追加点は成らず。

チェコはバスソーバ、ホルチノーバを中心に、ロング、ポストを使い分け連続5点、10—3とした。

○……後半、日本は、1分松下のロングが決まって調子を取り戻し小刻みに得点を返したのだが、15分9—14までが精いっぱい。前半の失点があまりにも大きすぎた。

相手の好プレーというよりも、日本は力を出し切れず、特に前半22回の攻撃チャンスのうち、7回もミスを重ねて、相手ボールになったのは痛かった。

また、第1試合に予定されたルーマニア×ノルウエー戦が、悪天候による空路閉鎖でルーマニアが着かず、我々の試合が、開会式直後に繰りあがったことも、初出場者が多いだけに、雰囲気になじめず、スタートの悪さにつながってしまった。（コーチ）

モントリオール・オリンピック 「3大陸代表戦」に望みかける

日本女子は、第6回世界女子選手権で、上位進出をはたせず10位に終ったため、この大会で狙った「モントリオール・オリンピック出場権」（上位4カ国）は獲得できず、来年6月28日から7月4日までワシントン（アメリカ）で開かれる「3大陸（アジア・アフリカ・アメリカ）代表決定戦」に最後の望みをかけることになった。

同決定戦のアジア代表権は、昨年2月、今回の世界女子選手権アジア予選決勝・対イスラエル戦（東京）での勝利で、日本が手中にしている。

代表権獲得の場合、晴れの代表チームは役員1名、選手12名となる予定。

善戦も力およばず

日本の第2戦・ルーマニアとの試合は、12月3日午後8時から行われた。審判＝スベンソン、クリステンセン（デンマーク）、観衆＝約七千

ルーマニア 24（12—10、12—8）18 日本

後記　鈴木　義男

○……第1戦に比べ日本の動きはよく、素晴しい出来といえた。

島田、古佐原、蔵田らがシャープなプレーで、ルーマニア守備陣を縫いポイント、ルーマニアに先手をとられながらも、5分1—2、10分3—5、15分5—7とつねに射程圏内に相手を置いていた。

満員の観衆も、優勝候補・ルーマニアと互角に試合を進める日本のプレーに沸き、盛りあがりをみせた。

○……しかし、ルーマニアはさすがに要所は手固い攻守を示し、長身のアルギール、ミクロスを中心に多彩な展開を示し、特に、日本にとって、前半19分6—8と詰めたあと、ミクロスのパワープレーに連続2点を奪われたのは痛かった。

○……この失点を境に、日本はしだいに押しこまれ、前半4点差。

【ルーマニア】		得
GK	イオネスク・170	0
	ヨニカ・173	0
FP	ゾース・170	7
	アルギール・171	8
	ラクスタ・176	0
	ミホス・170	0
	コヨカル・177	4
	ミクロス・180	3
	ボッシ・173	1
	ピッチゴオイ・167	0
	ルタス・154	0
	ホビネウ・160	1
PT	（2）	24

【日本】		得
GK	和田	0
	渡辺	0
FP	松下	6
	山下	0
	額賀	0
	加藤	0
	蔵田	5
	古佐原	2
	島田	5
	菊地	0
	河田	0
	穂積	0
PT	（3）	18

後半8分、いちどは3点差（12―15）まで盛り返したものの、再びたたみこまれた。

オフェンスはともかく、いぜんとしてディフェンス面で、体格の不利を克服できていないことを痛感させられた。

惜しまれる守りの乱れ

日本の第3戦・ノルウェーとの試合は、12月5日午後6時30分から行われた。審判＝スキンデリヌチュカルチ(ソ連)、観衆＝六千

ノルウェー 16（9―5、7―3）8 日本

得	【日本】		【ノルウェー】	得
0	和田	GK	ファウスク・173	0
0	久保	GK	クウル・172	0
1	島田	FP	アニスダール・172	5
1	古佐原	FP	クヌドセン・169	0
1	松下	FP	ブレーヌ・169	3
5	蔵田	FP	アーギャルト・170	1
0	額賀	FP	アンデルセン・172	5
0	菊地	FP	ファイエ・179	0
0	加藤	FP	エリクソン・179	0
0	穂積	FP	ダニエルセン・188	2
0	紀野	FP	ハンセン・171	0
0	山下	FP	オルセン・171	0
8	（4）	PT	（3）	16

後記

渡辺 慶寿

○……上位リーグ進出の望みを断たれたとはいえ、一桁（7～9位）のランクを得るためには、両国とも、この一戦に勝たねばならない。

ノルウェーは、すでに168回の公式戦キャリアを持つベテラン・アンデルセン、今大会最長身・ダニエルセン(188cm、75K)、巧者・アニスダールが中心。

日本は古佐原、島田、蔵田と絶好調・松下を軸に素早い攻撃で対抗する作戦。

○……立上り2点をリードされた日本は11分山下、12分PT(蔵田)で同点。20分まで一進一退となった。

しかし、日本はPT失敗などで先手をとれず、逆に21分6―5と5度目のリードを奪われたあと、守りの乱れをつかれて連続3失点ノルウェーに余裕をもたせてしまった。

○……後半4分松下で6―9と反撃の出足は上々だったのだが、アンデルセンの力強いポストプレーを主武器に攻めあげてくるノルウェー攻撃陣の勢いを防ぎ切れず、残り5分14―7と、大勢が決まってしまった。

日本は、早いプレーをみせて持ち味を発揮しながら、相手の頑強さに屈した。（団長）

◇その他の試合

ルーマニア、チェコを破る

チェコ 21（11―6、10―6）12 ノルウェー

(得点者)【チ】バスソーバ5、ホルチノーバ、ポラチコーバ各4、ホラローバ3、クッコーバ2、ミカルチコーバ、コザニョーバ、アンギャローワ各1

【ノ】アニスダール、クヌドセン、ブレーヌ、アンデルセン、ダニエルセン各2、アーギャルト、ヴェッスバーグ各1

ルーマニア 13（6―3、7―7）10 ノルウェー

(得点者)【ル】ゾース、アルギール各4、コヨカル3、ピッチゴオイルタス各1

【ノ】ダニエルセン5、ハンセン2、ブレーヌ、アーギャルト、アンデルセン各1

ルーマニア 20（9―2、11―4）6 チェコ

(得点者)【ル】アルギール8、ゾース5、フルコオイ3、ボッシ2、コヨカル、ミクロス各1

【チ】クッコーバ3、ボレドビコーバ、マチソーバ、プルタコーバ各1

○……ルーマニアの堅実な攻守が随所に発揮され、チェコはほとんどつけいるスキがなかった。

後半も同じようなペースで進み勢いづいたルーマニアは14分間に8ゴールを奪い、17―2と大勢を決めた。（この試合の記録は決勝リーグに適用される）

【順位】①ルーマニア②チェコ③ノルウェー④日本

◇予選リーグA組個人得点①アルギール(ル)20②ゾース(ル)16③松下(日)11④蔵田(日)10

予選リーグB組

ユーゴ 16（7―5、9―4）9 デンマーク

ハンガリー 17（7―6、10―3）9 デンマーク

ユーゴ 41（20―2、21―1）3 チュニジア

ハンガリー 28（14―3、14―3）6 チュニジア

ユーゴ 11（7―6、4―2）8 ハンガリー

(この記録は決勝リーグに適用)

(得点者)【ユ】イレース2、スプリノビッチ、ルキッチ、アンティック各2、トルティ、パラベルサ各1

【ハ】アンギャル2、レルケス、ラキ、ステルビンスキー、クシク、バガス、M・ナギイ各1

デンマーク 25（15―3、10―5）8 チュニジア

【順位】①ユーゴ3戦全勝②ハンガリー2勝1敗③デンマーク1勝2敗④チュニジア3敗

予選リーグC組

東ドイツ、ソ連引き分け

東ドイツ 10（6―6、4―4）10 ソ連

引き分け

第6回世界女子選手権日本選手団

・団　長　渡辺　慶寿（40才）日本協会技術部長
・監　督　井　　薫（37　）立石電機監督
・コーチ　鈴木　義男（41　）田村紡監督

	氏名	年齢	所属	身長	体重	出場数	【世】	【ド】	【親】
・GK									
①和田	祥子	23才	立石電機	167cm	67k	㉒	0	0	0
⑫久保	徳子	23	田村紡	161	57	⑤	0	0	0
⑯渡辺	久子	23	日本ビクター	161	63	⑨	0	0	0
・FP									
②古佐原	ひろ子	25	東京重機	153	49	㉛	10	0	16
③(主)島田	夏枝	25	立石電機	163	54	㉛	11	0	9
④蔵田	照美	24	立石電機	163	57	㉓	15	1	18
⑤加藤	美起子	21	日本ビクター	164	62	⑩	3	0	0
⑥額賀	美恵子	23	日本ビクター	162	61	⑫	0	0	5
⑦山下	恵美子	22	立石電機	160	57	㉓	4	0	13
⑧松下	仁美	21	田村紡	163	58	⑬	23	6	21
⑨菊地	春美	22	東京重機	163	64	⑬	2	2	8
⑩河田	栄子	20	田村紡	167	70	⑩	6	5	1
⑪穂積	美保子	20	日本ビクター	168	65	⑨	4	1	1
⑬紀野	奈々美	20	立石電機	165	64	⑨	4	6	0

・氏名左の○内数字は今回の背番号
・右の○内数字は公式国際試合出場数
【世】は世界選手権(5戦),【ド】は東ドイツ公式戦(2戦),【親】は東ドイツ親善試合（5戦）の通算得点

【東ドイツ】		得
GK	ゾーベル	0
	パスギイ	0
FP	リヒテル	5
	ゲールホフ	0
	ロスト	1
	ランゲ	0
	ジーフェルト	0
	カーント	0
	テイエツ	1
	クレッシュマル	1
	マッツ	0
	クラウゼ	2
PT	(2)	10

得	【ソ連】	
0	スクルスイウク	GK
0	ボブローワ	
2	ツルスチーナ	FP
3	マカレス	
0	イストチエンコ	
2	リトスチエンコ	
1	グルスチエンコ	
0	シュビーナ	
0	サカローワ	
0	デュビニーナ	
0	パンチュク	
2	ボブルース	
10	(4)	PT

○……大会緒戦で強豪の激突。ソ連が前回3位、東ドイツが同9位であったがための皮肉である。

結果論からすれば、この両者が大会の1、2位となったのだから「もったいない」カードであった。

試合は期待どおり壮烈な展開となり、互いにチャンスを活かしあって一進一退をつづけた。

前半は、わずかにソ連が押し気味で、特に3—4からリトスチェンコ、マカレスが連続ゴールしたあたりは、波に乗ったかとみえた。

しかし、東ドイツの守りは固くすぐに追いつき、後半10分8—8と8度目のタイスコア。

残り10分となって、いっそう壮絶な攻防となり、息詰まる接戦をつづけたが、ソ連は20分9—9からマカレス、東ドイツはそのあとリヒターが得点しただけで、勝負を決めるシュートは互いに放てず50分間の死斗を終えた。

東ドイツは後半14分9—8のあと、ソ連は後半16分9—9のあとそれぞれPTを落とし、試合後、両軍ベンチは、その不運を嘆いたが、球史に残る激戦といえた。

（この試合の記録は決勝リーグに適用される）

東ドイツ 14（9—4、15—2）6 ポーランド

ソ連 33（11—2、22—2）4 アメリカ

ポーランド 21（10—3、11—3）6 アメリカ

東ドイツ 29（13—4、16—4）8 アメリカ

ソ連 15（9—3、6—5）8 ポーランド

【順位】①東ドイツ2勝1分（得失点差39）②ソ連2勝1分(36)③ポーランド1勝2敗④アメリカ3敗

前回と順位変わらず日本

10～12位決定リーグ

予選リーグ各組4位の3カ国による「10～12位決定リーグ戦」は、12月7日から9日までの3日間、ヴイルニウス市で行われた。

アメリカから1勝あげる

日本の第1戦（遠征第11戦）・アメリカ（C組4位）との試合は12月7日午後4時から行われた。

日本 17（6—5、11—5）10 アメリカ

後記　井　薫

○……大会前の2週間をルーマニアに滞在し、強化につとめたアメリカは、プレオリンピック（昨秋9月、モントリオール）でカナダと対戦した時のフイルムで見たよりも、ロングシュートとポストプレーに進境のあとを示した。

【アメリカ・身長】			得
GK	トダール	163cm	0
	シエフツ	173	0
FP	ミラー	183	0
	クラントン	181	0
	ワシントン	180	0
	フォレスト	179	8
	リンドセイ	171	1
	ハレ	172	1
	ドワイト	168	0
	ジェラルド	172	0
	ホルムス	168	0
	リリース	165	0
PT	(5)		10

得	【日本】	
0	和田	GK
0	渡辺	
4	蔵田	FP
1	山下	
4	島田	
2	古佐原	
5	松下	
0	額賀	
0	紀野	
1	穂積	
0	河田	
0	菊地	
17	(2)	PT

前半20分5—4と日本はわずか1点のリードだったが、これは速攻の失敗で好機を逃したことと、アメリカのバスケットボール式のパスワークにとまどい、ポストからの失点を許した拙さにあった。

○……後半3分、いちどは6—7と先行を許したが、ディフェンスが落ち着くとともに、速攻への展開にムリがなくなり、6分から10分まで島田の連続4ゴール、11分古佐原、12分山下で12—7とリードを奪い、さらに雑になった相手ディフェンスをついて松下、蔵田らがロングを決めた。

○……オリンピック予選では、再び顔合せが予想されるが、西ドイツからコーチを迎え、さらに北欧を中心とした強化転戦を企てているだけに、アメリカのレベルアップは警戒が必要だ。（監督）

立ちあがり一気の連続得点

日本の第2戦（遠征最終戦）・チュニジア（B組4位）との試合は、12月9日行われた。

日本 26（14—3、12—7）10 チュニジア

後記　井　薫

○……前日アメリカと1点を争うシーソーゲームを展開したチュニジアも、試合開始直後、速攻でいきなり7—0とした日本の波にのったプレーに、すっかりペースを乱されたようだった。

日本の好調はそのあともつづき10分以降は、若手で試合を進めたが点差は開く一方だった。

コンビネーションという点で、やや雑になる欠点をみせたものの各自の持ち味が活き、たのもしいことだった。

アメリカ、アフリカ勢、それにカナダに対しては、日本独特のプレーの確立が最善であり、最終順位は前回と変わらぬ10位にとどまったものの、終盤へ来てからの若手の動きと、3大陸代表戦（＝前頁参照）への手がかりをつかめたことは大きかった。

なお、7位以下6ケ国の最多得点選手として松下（23点）が決まり、多数の観客の拍手のなかで表彰をうけたことは、本人にとっても、日本チームにとっても嬉しいことであった。

【チュニジア】			得
GK	オムラーヌ	170	0
	エスチエイク	160	0
FP	スマドチ	160	1
	クヘリイル	160	0
	ベン・ムラト	159	4
	ザラー	163	0
	スリマンセ	163	2
	グッサニ	161	2
	カムマミ	162	0
	クハマツシ	170	0
	ムラト	156	1
	フベス	168	0
PT	(3)		10

得	【日本】	
0	和田	GK
0	渡辺	
1	古佐原	FP
7	松下	
0	島田	
1	蔵田	
1	山下	
3	穂積	
5	河田	
2	菊地	
3	加藤	
3	紀野	
26	(3)	PT

アメリカが11位に

アメリカ 14（9—8、5—5）13 チュニジア

（得点者）【ア】ワシントン、ドワイト、リリース各3、フォレスト、ハレ各2、リンドセイ1

【チ】グッサニ5、カムマミ、クハマッシ各3、スマドチ、スリマンセ各1

◇10～12位決定リーグ個人得点5傑①松下（日）12②フォレスト（ア）10③グサニ（チ）7④蔵田、河田（ともに日本）5

7～9位決定リーグ

ポーランド 14（9－5、5－6）11 ノルウェー

ポーランド 16（9－5、7－4）9 デンマーク

ノルウェー 12（8－4、4－6）10 デンマーク

【順位】⑦ポーランド2勝⑧ノルウェー1勝1敗⑨デンマーク2敗

○……3国とも目標を失ったあとだけに、もう一つ盛りあがらず前回5位のポーランドが順当に北欧勢を制した。

ノルウェー×デンマークは、ノルウェーにとって、史上初めてデンマークの上位へ進出をはたせる絶好機とあって、もつれた経過になり、ノルウェーの気力が勝負を決めた。

デンマークには、一九六二年の第2回大会から出場しているアンネマリー・ニールセン（34才、168cm、62K）が、いぜん元気な姿を見せ、ポーランド戦では3点をマーク、スタンドの拍手をあびた。

ちなみに、今大会30代の選手は12名だった。

松下が◇「5位以下国」個人受賞　得点5傑　①松下（日）23②フォレスト（アメリカ）20③蔵田（日）・バソビッツ（ポーランド）15⑤アニスダール（ノルウェー）13

（注）全参加国の個人得点ベストテンは次頁に掲載

身長5傑

188cm	ダニエルセン	（ノルウエー）
187	オパシータ	（チエコ）
183	ドラゴビッチ	（ユーゴ）
183	ホルティノーバ	（チエコ）
183	アンデルセン	（デンマーク）
183	ミラー	（アメリカ）
153cm	古佐原	（日本）
153	マーレシ	（チュニジア）
154	ルタス	（ルーマニア）
156	ムラト	（チュニジア）
159	ブクロフ	（ユーゴ）
159	ベンムラド	（チュニジア）

全日本女子、勝率さげる

今回の遠征を終って全日本女子の公式国際試合は46試合となり、通算成績が19勝1分26敗（勝率42％）とかわった。

ちなみに、全日本男子（7人制）は、74戦25勝4分45敗（勝率34％）である。

古佐原 90点台　日本協会は、今回の遠征で行った公式国際試合7戦（世界選手権5、東ドイツ2）終了時の、現役ナショナル選手（FP15名）個人通算得点を次のようにまとめた。

古佐原91、島田59、蔵田52、松下35、額賀25、菊地20、山下16、加藤、河田、紀野いずれも13、穂積7、有賀、大場、小森、桜庭いずれも0

なお、48年11月デビュー以来公式国際試合に連続得点をマークしていた蔵田は、11月23日の東ドイツ戦（＝17頁）で無得点、17試合で途切れた。

欠ける「ゲームスタミナ」

□……善戦及ばず日本は、またしても上位リーグへ進出を遂げることができなかった。

思い切りのよい新旧交代と、アジア予選（50年2月）をはさんでの周到な強化合宿。臨戦体制は充分であったわけだが、出発前から予想されたように、ヨーロッパ勢にとっては、この大会がモントリオール行きの最後のチャンスとあって、すさまじいばかりの斗志でキエフ入り、その気迫にヨーロッパ初遠征9名をかかえる日本はやはり呑まれてしまった。

□……世界選手権などの組み合せ（予選リーグ）は、前回の実績をもとにして作成されるから、なかなか最初の関門を突破することが難しい。

少しも進歩していないように見えるのはそのためで、次回（一九七八、チエコ＝予定）も、今回のベストシックスのうち2カ国と必ず同組になるわけだから、ある意味では辛抱強く耐えて待たなければならない。優勝の東ドイツなど第3回までは、地域予選さえ通過できなかったのである。

□……耐えている間に課題を克服できるか、どうかがカギだ。古佐原（東京重機）、島田（立石電機）が、史上初の3回連続出場を果したのをはじめ、初出場者のなかにも、松下（田村紡）のように、持ち味をフルに発揮するなど、最近の若い世代の特色がよい面へ活かされて、キャリア（外国遠征という広い意味での――）については、いちじほど日本チームの〝泣きどころ〟ではなくなってきている。

□……むしろ、ますます大型化する外国チームとの連戦に耐え得る「ゲームスタミナ」が、深刻なテーマになってきた。

体格差は論じつくされているが大型選手に敏しよう性が加わり、パワーと巧さが加ってきたことは新たな驚異であり、脅威である。

男子選手でさえ「東欧勢との試合は、国内で2試合休みなしに戦うのと同じほど疲れる」という。

□……ゴールエリア周辺の攻防はまさに〝押し相撲〟といわれ、スタミナを消耗させる。

それが、攻撃面に響き、「日本はかってのスピード、鋭さがなくなった」という指適に結びつく。

暴言かもしれないが、男女ともナショナルプレイヤーの選考は、今の技術第一主義をやめにして、精神的、体力的たくましさを最優先しなければ、当分、景気のよい戦果を告げることは、できないのではあるまいか。

（S）

東ドイツ、無敗で乗り切る

～6強激斗の決勝リーグ～

ユーゴ（前回優勝）、五輪出場権失う

▽第1日（12月7日）

ユーゴ 13（7－4／6－9）13 チェコ
引き分け

〔得点者〕【ユ】ルキッチ4、スプリノビッチ、イレース、トルテイ、ルーター各2、アンテイック1、【チ】ホルチノーバ5、クッコーバ4、ボレドビコーバ2、バスソーバ、バルタコーバ各1。

○……ユーゴは立ちあがり3本のPTを活かして5－1とリードを奪い、その後も先行をつづけた。

　誰の目にもユーゴ有利だったが後半10分を過ぎる頃からディフェンスの動きが鈍り、ホルテイノーバを中心に拾身で射ちこんでくるチエコの攻撃をささえきれず、あっという間に同点に追いつかれたばかりか、23分にはクッコーバ（170cm、55K）のPTで13－12と逆転された。

　必死のユーゴは24分トルテイ（165cm、57K）のゴールで、どうにか引き分けたものの、連覇を狙うには、あまりにも拙い試合運びだった。

ソ連 17（13－8／4－8）16 ルーマニア

〔得点者〕【ソ】マカレス5、ツルスチーナ、ボブルース、グルスチエンコ各3、リトスチエンコ2、サカローワ1
【ル】ミクロス10、ゾース3、フルコイ2、オアンシア1

○……ミクロス（180cm、80K）にボールを集めて攻めこむルーマニアに対して、ソ連は巧い組織攻撃で主導権を握り、後半10分15－10とリードした。

　しかし、ルーマニアの粘りは驚異的で、じわじわと追いあげ、残り3分で16－17、場内を騒然とさせた。ソ連は、ここで守りを固め辛くも逃げ切った。

東ドイツ 10（6－6／4－3）9 ハンガリー

〔得点者〕【東】マッツ、クレッシュマル各3、ゲールホフ、ロストカーント、ランゲ各1
【ハ】ステルビンスキー5、I・ナギイ、アンギヤル、M・ナギイ、レルケス各1

○……ハンガリーの先行を東ドイツが追う展開。

　ハンガリーは、エース・ステルビンスキー（172cm、62K）の巧技でチャンスを得点に結びつけ、東ドイツの焦りを誘った。

　東ドイツは前半22分ようやく6－6に追いついたが、ハンガリーは後半2分、PTで優位を保ち、白熱した。

　しかし、地力のある東ドイツは4分同点のあと一気にたたみかけ13分には10－7と主導権を奪ったハンガリーも拾てず、残り10分から激しく反撃、1点差まで詰めたが、東ドイツに巧くかわされたハンガリーは6－6、7－7の場面でPT2本をはずしたのが痛かった。

ユーゴ、1点差に泣く

▽第2日（12月9日）

ハンガリー 11（9－6／2－4）10 ルーマニア

得	【ハンガリー】		【ルーマニア】	得
0	ブイドサ・174	GK	イオネスク	0
0	ケジ・168		スタン	0
0	メジェリ・182	FP	ゾース	2
0	レルケス・175		アルギール	1
1	ラキ・180		フルコオイ	2
4	ステルビンスサー・172		ミホス	0
3	クシク・171		オアンシア	0
0	サムス・168		コヨカル	1
1	バガス・166		ミクロス	4
1	ネメス・172		ボッシ	0
0	アンギヤル・163		ピッチゴオイ	0
1	M・ナギイ・170		ラクスタ	0
11	（2）	PT	（1）	10

（注）ルーマニア選手の身長は本誌8頁「予選リーグA組」の項参照。

○……ルーマニアはノータイムで得た同点PTをゾース（170cm、70K）がゴールポストにぶつけて失敗、手痛い1敗を喫した。

　試合は終始主導権が入れ替る激戦となり、序盤ルーマニアが3－0とリードすれば、前半なかばからはハンガリーの速攻が冴えて一気に逆転。

　後半は、当りの強いディフェンスを応しゅうさせ、特にハンガリーは追加点をあげられず苦しんだ。

　ルーマニアは7－10から追いあげ23分ゾースのシュートで10－11そして興奮の極に達したなかでのPTだったが、ハンガリーに勝運があった。

ソ連 16（12－2／4－6）8 チェコ

〔得点者〕【ソ】リトスチエンコ6、ツルスチーナ5、マカレス、デュビニナ各2、サカローワ1、
【チ】ホルチノーバ、バスソーバ各3、ボレドビコーバ、クッコーバ各1

○……熱戦つづきの決勝リーグで初めて大味(おおあじ)な試合。

　ソ連はリトスチエンコ（162cm、58K）の大活躍で前半20分9－0と一方的。後半1分には11点差（13－2）がついた。

　チエコは、終盤どうにか攻撃がまとまったが焼石に水。

東ドイツ 13（7－6／6－6）12 ユーゴ

得	【東ドイ】		【ユーゴ】	得
0	ツゾーベル	GK	イストバノビッチ・172	0
0	パスギイ		ティトリッチ・173	0
0	ゲールホフ	FP	ブクロフ・159	1
0	マッツ		スプリノビッチ・168	3
1	クラウゼ		マブラモビッチ・174	0
0	ロスト		イレース・176	1
1	カーント		トルテイ・165	1
0	ランゲ		ルキッチ・180	4
0	ジーフエルト		アンテイック・181	0
4	テイエツ		ルーター・171	1
1	リヒテル		オグイエノビッチ・173	0
6	クレッシュマル		ベイノビッチ・170	1
13	（2）	PT	（3）	12

（注）東ドイツ選手の身長は本誌17頁「日本×東ドイツ交流」の項参照。

○……前回（一九七三）の勝者・ユーゴ、前々回（一九七一）の勝者・東ドイツ。すばらしい一戦と

個人得点（ベストテン）

①	マカレス	（ソ連）	35
②	ツルスチーナ	（ソ連）	32
③	松下	（日本）	23
③	リトスチェンコ	（ソ連）	23
③	クレッシュマル	（東ドイツ）	23
③	ミクロス	（ルーマニア）	23
③	ゾース	（ルーマニア）	23
⑧	ルキック	（ユーゴ）	22
⑨	アルギール	（ルーマニア）	21
⑨	ステルビンスカ	（ハンガリー）	21
⑯	蔵田	（日本）	15
㉝	島田	（日本）	11
㊱	古佐原	（日本）	10

なり七千のファンを熱狂させた。

ユーゴの出足はよく8分3—1としたのだが、東ドイツも18分PTで5—5としてからは巧みにペースを握り、それ以後いちどもユーゴに先手をとらせなかった。

特に前半終了間際から後半7分まで巧者・ティエッツ（163cm、69K）の活躍で9—6と主導権を握ったのは大きかった。

ユーゴも、この1戦を落とすとモントリオール行が危くなるとあって懸命に攻めるのだが、8、12、17、21分と4回1点差まで詰めながら、あと一歩がなく、残り1分イレース（176cm、67K）で12—13としたまでで力つきた。

ソ連、好調に勝ち進む

▽第3日（12月11日）

ハンガリー 12（6—1 6—4）5 チェコ

〔得点者〕【ハ】クシク5、ステルビンスキー4、I・ナギイ2、レルケス1、【チ】ホルチノーバ、クッコーバ各2、バスソーバ1

○……チェコは完全に調子を崩してしまった。

ハンガリーの手固い守りをゆさぶり切れず、前半の1点は23分のPTという低調。

ハンガリーは後半15分10—3とはなして主力を休ませる余裕ぶりだった。

東ドイツ 10（5—4 5—3）7 ルーマニア

〔得点者〕【東】ゲールホフ、マッツ、カーント、テイエツ各2、リヒテル、クレッシュマル各1【ル】ミクロス3、ゾース2、フルコオイ、ピッチゴオイ各1

○……いったんペースをつかんだ時の東ドイツの強さは抜群だ。

立ちあがり0—2のハンデをはね返したあと、前半20分マッツ（176cm、70K）のシュートで初のリード（5—4）。

後半開始と同時に一気のスパートをみせ、リヒテル（169cm、67K）とカーント（166cm、68K）の連続得点で7分8—4とあけた。

ルーマニアもけして不調ではなかったが、動きのある相手守備陣にまどわされ、前半17分から約20分間無得点に封じこめられた。

後半15分すぎ、相手の反則退場をきっかけに連続3ゴール、7—8と詰め寄ったが、東ドイツもそのあとマッツ、テイエツの好技で加点、優勝へ大きく前進した。

ソ連 17（7—6 10—6）12 ユーゴ

得	【ソ連】			【ユーゴ】	得
0	スクルスイウク	175	GK	イストバノビッチ	0
0	ボブローワ	169	GK	テイトリッチ	0
1	イストチエンコ	162	FP	スプリノビッチ	4
3	ツルスチーナ	178	FP	ブクロフ	0
10	マカレス	176	FP	イレース	1
1	リトスチエンコ	162	FP	アブラモビッチ	0
1	ボブルース	169	FP	アンテイック	4
0	グルスチエンコ	172	FP	トルテイ	0
0	シュビーナ	166	FP	ルキッチ	0
0	デュビニーナ	176	FP	ベイノビッチ	0
0	パンチュク	173	FP	ルーター	3
1	サカローワ	177	FP	オグイエノビッチ	0
17	（4）		PT	（1）	12

○……五輪出場へアトのないユーゴは気負ってのスタートだったがその斗志が裏目。いきなりトルテイが警告をくい、そのあとPTを3本とられた。

ソ連はこのうち1本を落としたが、ボブルースの好技もあり、10分4—0と優位。

ユーゴも20分過ぎから反撃を実らせ24分6—5、残り1分間、互いに1点づつを入れあって勝負を後半へ持ちこんだ。

後半も一進一退がつづき、ユーゴは16分スプリノビッチ（168cm、68K）で待望のタイスコア（12—12）。

しかし、こうした場面のあと今回のユーゴはもう一つハリがないあっさりマカレス（176cm、74K）に守備網を切り崩されて連続3ゴールを許し、20分15—12。連覇どころか、モントリオール行きさえ苦しいピンチに立たされた。

ソ連、東独の争い 決勝リーグ3戦と予選リーグからの持ちこみを加えて、各国は4試合を終了。星勘定は、東ドイツ、ソ連がともに3勝1分でトップに立ちハンガリーが2勝2敗、ユーゴが1勝1分2敗、ルーマニアが1勝3敗、チエコが1分3敗となり、まず東ドイツ、ソ連のオリンピック出場が確定、チエコが断念せざるを得なくなった。

残り2つの座は3カ国のひしめ

順位決定戦勝敗表

	ド	ソ	ハ	ル	ユ	チ	P	得	失
①東ドイツ	…	(△)	○	○	○	○	9	60	49
②ソ連	(△)	…	●	○	○	○	7	70	58
③ハンガリー	●	○	…	○	(●)	○	6	52	46
④ルーマニア	●	●	●	…	○	(○)	4	65	55
⑤ユーゴ	●	●	(○)	●	…	△	3	59	63
⑥チエコ	●	●	●	(●)	△	…	1	43	78

【7～9位決定リーグ】

	ポ	ノ	デ	P	得	失
⑦ポーランド	…	○	○	4	30	20
⑧ノルウエー	●	…	○	2	23	14
⑨デンマーク	●	●	…	0	19	28

（Pはポイント）

【10～12位決定リーグ】

	日	ア	チ	P	得	失
⑩日本	…	○	○	4	43	20
⑪アメリカ	●	…	○	2	24	30
⑫チユニジア	●	●	…	0	23	40

（注）決勝リーグの（ ）内勝敗は予選リーグの記録

歴代優勝国

①1957 チエコ
②1962 ルーマニア
③1965 ハンガリー
④1971 東ドイツ
⑤1973 ユーゴ
⑥1975 東ドイツ

きあい。

一方、優勝争いはソ連がこの日まで得失点差14で、同5の東ドイツをリード、地元ファンの期待は大きくふくらまった。

ハンガリー、ソ連の夢砕く

▽第4日（＝最終日、12月13日）

ハンガリー 12（7—5、5—5）10 ソ連

得	【ハンガリー】		【ソ連】	得
0	ブイドサ	GK	スクルスイウク	0
0	ベルゼニイ	GK	ボブローワ	0
1	クシク	FP	イストチエンコ	0
1	I・ナギイ	FP	ツルスチーナ	5
4	ステルビンスキー	FP	マカレス	1
4	ラキ	FP	リトスチエンコ	2
1	レルケス	FP	ボブルース	2
0	メジエリ	FP	グルスチエンコ	0
0	アンギヤル	FP	シュビーナ	0
1	バガス	FP	サカローワ	0
0	M・ナギイ	FP	パンチュク	0
0	タバスシイ	FP	デュビニーナ	0
12	（4）	PT	（5）	10

○……ソ連はこの試合に勝てば、東ドイツがチェコ戦で11点差以上つけない限り優勝、という大切な一戦だったが、さすがに固くなったか、開始1分ボブルース（169cm 63K）の得点で先行した以外は、ついに一度もリードを奪えず敗れ大魚を逸するハメとなった。

○……ソ連は10分1—4の劣勢から追いあげ、後半5分PTで7—7のタイ、一万近い大観衆をエキサイトさせたが、ハンガリーの斗志も素晴しく9分レルケス（175cm 69K）、10分ラキ（180cm、77K）11分ステルビンスキーとたたみかけた。

この突き放しには、さしものソ連もダメージを受け、20分8—12と開いたあと2点を返したが及ばなかった。

立ちあがりの拙戦が〝優勝〟を逃すことになった。

ハンガリーは、全員が平均した力をもち、守りの要・GKブイドサ（174cm、72K）の堅守も光った。

東ドイツ、後半一気に勝負

東ドイツ 17（7—7、10—4）11 チェコ

（得点者）【東】クレッシュマル6、リヒテル5、テイエツ4、カーント2、
【チ】クツコーバ4、マテイソバ3、ポラシコーバ2、ホルチノーババ、スソーバ各1

○……優勝の望みが生まれた東ドイツだったが、ソ連同よう前半は固さがほぐれず、16分6—3の優位を保てず25分7—7とされた。

しかし、後半立ちあがりの二本のPTを30才のベテラン・リヒテルに射たせ重苦しいムードを払いのけようとしたベンチの策が当ってリード、すっかり落ち着いた

こうなると両者の勢いが違う。

チェコは、ほとんど相手ディフェンスを攻め崩せず12分間無得点17分15—8と大勢が決まった。

ルーマニア 12（6—6、6—5）11 ユーゴ

（得点者）【ル】フルコオイ4、コヨカル、ミクロス、ボッシ、ホビンク各2
【ユ】ルキッチ3、イレース、ルーター各2、ブクロフ、スプリービッチ、アブラモビッチ、アンテイック各1

○……10度目の同点、11—11。残り時間は30秒あるかないかの土たん場でユーゴはアブラモビッチが反則退場、色めきたつルーマニアは一気のなだれこみから、ボッシ（173cm、67K）が劇的な決勝点をあげた。

それにしても壮烈な試合。まさかこの両者で、モントリオールへの最後のパスポートを争うとは思わなかった。

終始異様なムードがみなぎり、どの選手の表情も引きつってみえる。

一進一退、2点差がついたのは前半16分ユーゴが5—3とした1回だけ。同点場面の通算時間は、なんと24分間もあったのである。

球史に残る激斗のつづいた決勝リーグのなかでも、特筆されるべき一戦であった。

▽予選リーグ記録の適用試合

A・ルーマニア 20——6 チェコ
B・ユーゴ 11——8 ハンガリー
C・東ドイツ 10（分）10 ソ連

【注】「決勝リーグ」の後記は「レキップ」（フランス）、「週刊ハンドボール」（西ドイツ）「アサヒイブニングニューズ」、「ジャパンタイムス」の各記事を、本誌編集委員でまとめたものです。

ソ連から3選手 ベストセブン

キエフに集ったスポーツライターによる今大会のベストセブンは次のとおりである。

▽GKブイドサ（ハンガリー）▽FPクレッシュマル（東ドイツ）、ツルスチーナ、ボブルース、リトスチェンコ（いずれもソ連）、クシク（ハンガリー）、イレース（ユーゴ）。

東ドイツらに五輪出場権

IHF（国際ハンドボール連盟）は、大会終了後、東ドイツ、ソ連、ハンガリー、ルーマニアに、モントリオールオリンピック出場権が与えられたことを表明した。

オリンピックは6カ国で行われ、開催国・カナダとあわせて、これで5カ国の顔ぶれが揃ったことになる。

残る1カ国は、アジア（日本）、アフリカ、アメリカ大陸代表によって争う「3大陸代表」である。

◇数字でみる第6回世界女子選手権◇

【国別攻撃分析】

	試合数	シュート数	得点	シュート率(%)	攻撃回数	攻撃ミス	得たるPT	PT得点	得たるFT	得点FT	ボール保持時間
⑩日本	5	213	82	38.6	268	86	21	16	89	0	72分56秒
①東ドイツ	7	202	113	55.9	243	61	22	18	127	2	119—30
②ソ連	7	248	111	44.4	253	57	45	35	161	0	113—35
③ハンガリー	7	224	97	43.4	261	74	29	19	152	0	89—15
④ルーマニア	7	228	102	44.7	267	83	23	16	206	0	125—11
⑤ユーゴ	7	233	116	49.7	262	64	22	18	150	0	109—24
⑥チエコ	7	234	85	36.3	267	94	32	29	160	0	114—11
⑦ポーランド	5	164	62	37.8	210	73	16	11	130	2	81—45
⑧ノルウーエ	5	164	61	37.1	208	61	12	8	132	0	101—28
⑨デンマーク	5	165	62	37.5	213	74	37	9	107	0	83—13
⑪アメリカ	5	125	42	34.4	252	129	20	14	109	0	109—41
⑫チュニジア	5	165	40	34.2	273	128	11	8	74	1	104—06

（注）FTはフリースローの意

ミュンヘン・オリンピック（一九七二）を機に、IHF（国際ハンドボール連盟）はそれまでの特別記録をいっそう詳しく、細かいものにしているが、今回も報道関係者、大会関係者に、連日そのサービスが行われた。

◇

「国別攻撃分析」をみてみると、今回の順位がみごとに投影されている。

特に、東ドイツのシュート率が56％弱というのは抜群である。

全般的に東欧勢の強さは、統制のとれた組織力にあるといわれ、個人技は、その上に立って発揮するのを身上としている。

スピーディな動きから突破口、シュートコースが築かれそこからアタッカーが射ちこんでくるというパターン、確実なポストへのパスプレーといった〝確実さ〟が、上位国のシュート率に示されている。

攻撃回数とシュート数の関連も面白い。

1回の攻撃で、2本も3本も射つケースがあるので、単純な割り算はできないが、両者の数値は、上位国ほど差がない。

例えばチュニジアなど273回の攻撃で165本のシュートしか射てないとなると、相手のゴール前へ攻めこむまでに、担当の失敗があったとみなければならない。

東ドイツ、確実な力

シュート失敗の内容についてもかなり細かい分析が示されている

日本は、131本（失敗率61・4％）のシュートミスをおかしているが相手GKにストップされたシュートが65本（約49％）もある。

シュート失敗の内容

	GK阻止	ポスト	ゴール外	その他
日本	65	21	20	25
東ドイツ	47	17	16	14
ソ連	65	20	32	20
ハンガリー	55	32	31	9
ルーマニア	56	33	22	15
ユーゴ	47	21	25	24
チエコ	56	18	28	47
アメリカ	51	6	18	6
チュニジア	75	5	23	22

（注）「ポスト」とはポストに当たったシュート

パワーの不足を感じないわけにはいかない。

上表のうち、攻撃ミスというのは、シュートに持ちこむまでの、自チームのミスプレー（オーバーステップ、ラインクロスなどの反則も含む）を示すが、最少のソ連でも1試合平均8回を数えており女子の試合内容がもう一つ男子に比べて見劣りがある、という評判は、このあたりに原因があるかも知れない。

日本、速いプレー示す

ボール保持時間というのは、IHFが各大会でもっとも力を入れて調べているデータだ。

日本が最少にとどまっているのは、マイ・ボールになってから、シュートチャンスをつかむまでの仕掛けが早いのか、ミスプレーが早い段階で出てしまうか、どちらかだ。

仕掛けの早さは、それなりに長所もあるが、相手のディフェンスを崩し切れぬ前に射っている、ということはないのだろうか。

日本の早さ、速さについては、次表を見るとはっきりする。

防御からの速攻回数と得点

	回数	得点
日本	82回	36点
東ドイツ	50	20
ソ連	65	23
ハンガリー	44	15
ルーマニア	28	3
ユーゴ	48	14
チエコ	42	14
アメリカ	10	4
チュニジア	19	4

問題はその成功率。この資料からみると43％弱で、速攻を〝日本のお家芸〟とするならば、せめて50～60％が欲しい。

そうなれば、日本の全般的な順位も引き上がることになろう。

PTでは、チエコが3本落としただけというのが光る。クツコーバ（170cm、55K）、バスソーバー（164cm、58K）の二人が26本決めている。ちなみに、PT得点1位は18点をあげたツルシチーナ（ソ連、178cm、75K）。

国別ではソ連が圧倒的。国際試合は、公式戦でも地元有利の判定がみられる、という風評を感じるのだが、偏見にすぎるだろうか。

なお、データは、12カ国すべて発表されているが、本誌は、上位国と、モントリオール予選で対戦を予定されるアメリカ、チュニジアの両国を中心とした。

松下、個人得点で健斗

個人得点は、本誌12頁所報のとおりT・マカレス（ソ連）が35点をマーク、ベストスコアラーとなった。絶讃を浴びたのは日本の松下仁美(田村紡)。

ベストテンの中で、試合数5は松下一人で、他の9人はいずれも7試合の通算。松下は、「5試合組」のベストコアラーとして表彰された。

反則退場と警告の少なさを競うフェアプレー賞は、ソ連がマイナス19（退場通算時間8分、警告11回）で受け、以下ルーマニア、東ドイツ、ハンガリー、ユーゴ、チェコの順。

「5試合組」では、日本がマイナス11（退場8分＝2分4回、警告3回）でトップだった。

第2回東ドイツ交流

全日本女子が遠征

第2回日本―東ドイツ交流は、世界女子選手権へ向かう全日本女子チーム（渡辺慶寿団長ら役員3、選手14）が遠征して、11月16日から29日まで東ドイツ各地で、7試合を行ない、日本の3勝4敗に終った。

第3回交流は、東ドイツ側が来日して今春5月または、今秋9月、日本で開かれる予定。

一昨年の第1回交流は、東ドイツ男子ナショナルが来日して、日本の6戦6敗だった。

後半の追いあげ成らず

第1戦（遠征第1戦）・マグデブルグスポーツクラブとの試合は11月16日、マグデブルグで行われた。

SC・マグデブルグ 20（10―6、10―9）15 日本

得	【日本】		【マグデブルグ（身長）】	身長	得
0	和田	GK	ハイネ	162cm	0
0	久保	GK	オベルリンゲ	169	0
5	古佐原	FP	ゲールオフ	173	6
0	島田	FP	ドライブロット	176	0
3	蔵田	FP	アイビッシュ	169	2
0	加藤	FP	カツセンバウム	166	2
0	額賀	FP	シーフェルト	167	4
2	山下	FP	ミカエルス	166	0
3	松下	FP	テッセ	166	2
3	菊地	FP	フィザル	178	2
0	河田	FP	テイニイエル	178	0
0	穂積	FP	リッキ	170	2
16（6）		PT	（3）		20

◇その他の出場者【マ】FPミューラー・176cm＝得0【日】GK渡辺、FP紀野＝ともに得0

惜しくもせり負ける

第2戦・ライプチヒスポーツクラブとの試合は11月18日、ライプチヒのリプライスポーツホールで行われた。（観衆四百）

SC・ライプチヒ 19（11―9、8―7）16 日本

得	【日本】		【ライプチヒ】	身長	得
0	久保	GK	キーゼベッター	170	0
0	和田	GK	ケニツヒ	169	0
0	山下	FP	ワグネル	176	3
3	古佐原	FP	シュナイダー	167	2
4	松下	FP	ステンムラー	169	4
0	島田	FP	ヘルビグ	164	2
2	菊地	FP	ティツテル	160	5
0	加藤	FP	プレスキン	175	0
1	河田	FP	ロスマン	160	0
0	額賀	FP	スンクネクト	170	2
0	穂積	FP	ビーベル	165	1
0	蔵田	FP	ジンマーマン	172	0
19（4）		PT	（4）		19

◇その他の出場者【日】GK渡辺＝得0

ハーレから1勝あげる

第3戦・ハローレン・ハーレとの試合は11月20日ハーレ市で行われた。

日本 15（7―10、8―3）13 ハローレン・ハーレ

得	【日本】		【ハーレ】	身長	得
0	渡辺	GK	カロップ	174	0
0	和田	GK	ブンゼ	172	0
4	蔵田	FP	シュワルト	160	1
4	山下	FP	ガーシャル	176	0
1	島田	FP	ワグネル	172	4
0	紀野	FP	ベルンネ	173	2
3	古佐原	FP	フェイクト	172	0
0	加藤	FP	シュツカルト	170	1
0	額賀	FP	シーバッハ	169	4
0	穂積	FP	ハイゼッヒ	168	1
1	松下	FP	ミュラー	168	0
2	菊地	FP	ベイグナー	178	0
15（2）		PT	（4）		13

◇その他の出場者【ハ】FPシュルツ・176cm＝得0、【日】GK久保、FP河田＝ともに得0

若手で臨み敗れる

第4戦は、東ドイツナショナルチームとの公式国際試合として11月22日午後6時からベルリン・スポーツフォーラムで行われた。

東ドイツ 28（14―8、14―5）13 日本

得	【日本】		【東ドイツ】	身長	得
0	久保	GK	ゾーベル	173	0
0	和田	GK	ルドルフ		0
3	紀野	FP	ゲールホフ	172	2
1	穂積	FP	マッツ	176	0
3	河田	FP	クラウゼ	175	1
3	松下	FP	ロスト	171	0
2	菊地	FP	カーント	166	5
1	蔵田	FP	カーン	173	1
0	古佐原	FP	ティエツ	163	4
0	島田	FP	リヒテル	169	8
0	山下	FP	クレッシュマル	168	6
0	額賀	FP	ミカエルス	166	1
13（0）		PT	（0）		28

主力温存、大敗喫す

第5戦は、東ドイツナショナルチームとの公式国際試合第2戦として11月23日午前11時30分からベルリン・スポーツフォーラムで行われた。

東ドイツ 32（15―6、17―2）8 日本

得	【日本】		【東ドイツ】	得
0	和田	GK	ゾーベル	0
0	久保	GK	パスギイ	0
3	松下	FP	ゲールホフ	2
2	河田	FP	マッツ	3
3	紀野	FP	クラウゼ	3
0	菊地	FP	カーント	2
0	加藤	FP	カランゲ	3
0	山下	FP	カーン	1
0	古佐原	FP	リヒテル	9
0	島田	FP	クレッシュマル	1
0	蔵田	FP	ジーフエルト	8
0	額賀	FP	プッジェール	0
8（0）		PT	（0）	32

松下、7点をマーク

第6戦、TSC・ベルリンとの試合は、11月25日ベルリンで行われた。

日本 19（10―8、9―5）13 TSC・ベルリン

得	【日本】		【ベルリン】	得
0	渡辺	GK	ノスナゲル	0
0	久保	GK	ミュラー	0
4	古佐原	FP	ハンスドルフ	0
2	蔵田	FP	フィッシュ	6
0	額賀	FP	ビルリッヒ	2
7	松下	FP	ラウフマン	0
4	島田	FP	シュニック	0
1	菊地	FP	アプレル	1
1	山下	FP	ガレン	0
0	河田	FP	ドルスリン	1
0	穂積	FP	ダン	2
0	加藤	FP	フリック	1
19（5）		PT	（3）	13

◇その他の出場者【日】GK和田、FP紀野＝ともに得0

最終戦にも快勝

第7戦（東ドイツ最終戦）は、エムポール・ロストックSCとの試合は11月27日ロストック市で行われた。

日本 26（12―7、14―11）18 エムポール・ロストック

得	【日本】		【ロストック】	得
0	和田	GK	ポルケウム	0
0	渡辺	GK	ヘンネル	0
1	古佐原	FP	ミント	1
3	蔵田	FP	ホフエナー	0
6	松下	FP	バドレック	5
4	島田	FP	ベーント	0
6	山下	FP	ローネ	5
0	菊地	FP	ロルフ	2
5	額賀	FP	パーヌ	3
0	紀野	FP	グライスト	0
0	河田	FP	フレッセ	1
1	穂積	FP	ハウゼ	1
26（2）		PT	（5）	18

◇その他の出場者【ロ】FPリルビス＝得0、【日】GK久保、FP加藤＝ともに得0、

【お知らせ】本誌では、次号にも今回のヨーロッパ遠征に関する記事を特集の予定です。

アメリカ3度目の出場目指す

たけなわのオリンピック予選

西ドイツ〝東〟に3点差の勝利

オリンピックイヤーの開幕を告げるモントリオール・オリンピックアメリカ地域予選アメリカ×アルゼンチン戦（2試合）は、1月23日ヴエノスアイレスで第1戦、27日バッファローで第2戦が行われる。

アメリカは、ベルリン（一九三六、11人制）、ミュンヘン（一九七二）に連続出場しており今回勝てばハンドボールが実施されたオリンピックには、すべて参加することになる。なおメキシコ、ブラジルなどはエントリーしていない。

一万の大観衆集めた東西独戦

昨秋11月、21カ国が参加して火ぶたを切ったヨーロッパ地域予選は、11月24日からの第2節、12月15日からの第3節で、第1次リーグを終えた。

注目の西ドイツ×東ドイツ戦は12月21日、ミュンヘンのオリンピックホールを埋めつくす一万四百人の大観衆を集めて行われ、予想どおりエキサイトした好試合を展開

序盤リードを許した西ドイツは、前半なかばから反撃に移り、逆に3点をリード。しかし、東ドイツも粘り後半15分12―11と逆転した熱狂的な声援をうける西ドイツはそのあと新しきエース、デッカルム（グンメルスバッハ、1m98）の活躍で得点を重ねて主導権を奪い返し、先勝した。

第2戦は3月6日、東ベルリンで行われるが、東ドイツがどう巻き返すか、早くも騒然たる話題に包まれている。

このほか、スウエーデンがストックホルムでのホームゲームを手固く進めてチェコを降した。

また、ユーゴ、ソ連は乗りこみの不利にもかかわらず、アイスランド、フランスをそれぞれ制し、この両国のモントリオール行きは確定的となった。

ポーランドもノルウェーにてこずりながら遠征試合を勝ちとり、今後を楽にした。

伯仲を伝えられるスペイン×デンマークは引き分け、デンマークが有利な戦局である。

惑星視されていたブルガリアはスイス、ハンガリーに連敗、思わぬ低調である。

スイス、ブルガリアを破る

第2節（11月24日～30日・各地）

▽第1群
アイスランド（1勝） 29（16－3、13－7）10 ルクセンブルグ（2敗）

▽第2群
スウエーデン（1勝） 28（15－7、13－7）14 イタリア（2敗）

▽第3群
スイス（1勝1敗） 17（8－8、9－6）14 ブルガリア（1敗）

▽第4群
フランス（1勝） 23（13－14、10－8）22 オーストリア（2敗）

▽第5群
西ドイツ（1勝） 21（10－8、11－2）10 ベルギー（2敗）

▽第6群
ノルウェー（1勝） 55（25－4、30－1）4 イギリス（2敗）

▽第7群
スペイン（1勝） 15（7－6、8－6）12 オランダ（2敗）

スウエーデン、チェコ降す

第3節（12月15日～21日・各地）

▽第1群
ユーゴ（2勝） 24（12－10、12－8）18 アイスランド（1勝1敗）

▽第2群
スウエーデン（2勝） 14（6－8、8－4）12 チェコ（1勝1敗）

▽第3群
ハンガリー（2勝） 19（9－6、10－7）13 ブルガリア（2敗）

▽第4群
ソ連（2勝） 31（16－12、15－4）16 フランス（1勝1敗）

▽第5群
西ドイツ（2勝） 17（8－8、9－6）14 東ドイツ（1勝1敗）

▽第6群
ポーランド（2勝） 25（14－7、11－12）19 ノルウェー（1勝1敗）

▽第7群
スペイン（1勝1分） 15（8－7、7－8）15 デンマーク（1勝1分）

二次リーグへ進む

激闘をつづけるヨーロッパ地域予選は、1月いっぱい小休止のあと、いよいよ2月2～8日に第4節、16～22日に第5節と二次リーグへ進む

【第4節】
- ルクセンブルグ×ユーゴ（第1群）
- イタリア×チェコ（第2群）
- スイス×ハンガリー（第3群）
- オーストリア×ソ連（第4群）
- ベルギー×東ドイツ（第5群）
- イギリス×ポーランド（第6群）
- オランダ×デンマーク（第7群）

【第5節】
- アイスランド×ルクセンブルグ（第1群）
- スウエーデン×イタリア（第2群）
- ブルガリア×スイス（第3群）
- フランス×オーストリア（第4群）
- 西ドイツ×ベルギー（第5群）
- ノルウェー×イギリス（第6群）
- スペイン×オランダ（第7群）

世界へはばたけ日本のハンドボール

（協賛者御芳名）

◇愛知県実業団ハンドボール連盟加盟会社及び団体◇

AHF、ついに正式発足

1月18日付各紙が、中国通信の報道として伝えたところによると1月12日から14日までクウェートで開かれたアジアハンドボール連盟結成会議によって「アジアハンドボール連盟」（AHF）が正式発足した。

AHF本部はクウェートに設置され、初代会長にはファハド・アル・アハマド・アル・ザバハ氏（クウェートオリンピック委員会委員長）を選出、事務局長にはジアド・アブドル・ハッサン氏（パキスタン）が就任した。

また、バーレーン代表が第一副会長に、中国代表が第二副会長に選出された、と伝えられている。

日本協会も、この会議への招へい状を受けとっていたが（既報）財政的な事情で欠席した。

日本がすでにメンバーになっているのか、など不明確な点が多いため、議事録などの入手につとめている。

◇

AHF結成を聞いて…杉山　茂

49年9月以来、中国、パキスターン、クウェートらが熱心に結成準備を進めていた経偉からみて、今回の会議招集は、当然、「旗あげ」につながるものであった。

これで、難しくなったのはIHF（国際ハンドボール連盟）との関係だ。

IHFは、アジアを「極東連盟」と「近東連盟」に分けることを提唱し、今夏7月リスボンでのIHF通常総会で承認にこぎつけようと、手を打っている。

49年10月の総会（ジェスロ＝イタリア）に、パキスタンからAHF問題が持ちこまれたが、パキスタンが、IHF未加盟国という理由で、議場へ出されなかった。

この時点からIHFとAHF（準備委）の仲は微妙になっておりIHFの「アジア二分案」は、AHF準備委との〝対立〟でしかないような印象を与えている。今回の会議には、IHF役員も出席していたハズだが、渡辺和美アジア選出理事が、日本協会荒川清美理事長に語ったところでは「AHF結成を思い留まらせるために出席するのだ」ということだった。

もし、それがIHFの〝真意〟なら、その工作は、失敗に終ったとみなければならない。（注・渡辺氏は出席メンバーからもれている）

ジエスロ総会以後、IHFはAHF準備委を説得した、とも聞いていたが、私は、そう簡単にケリがつくとは思っていなかった。

クウェートの会議も、一部には「近東連盟」結成のため、IHFの指示によって開かれるように受けとられていたが、あくまで〝招かれただけ〟にすぎなかったのではないか。

さて、こうなった以上、AHF内に中国、パキスタン、バーレーン、パレスチナなどIHF未加盟国が多いからといって〝認知〟しないような狭量をIHFは示すべきではないだろう。

面子にこだわって、今後も「二分案」などを振りかざすと、混乱するばかりだ。

IHFは「極東連盟」の結成について、話し合うため、3月13日ホンコンの「ミラマール・ホテル」で日本、韓国、ホンコン、朝鮮民主々義人民共和国(北朝鮮)、インド、台湾、それにオーストラリアの各代表による会議を開くよう招集している。

IHF事務総長のM・リッケンバーガー氏（西ドイツ）も出席する予定だが、クウェートでの決議に、どう反応するか注目される。

日本としては、AHF結成を支持して、IHFに「二分案」を白紙に戻すよう働きかけるのが、いちばんよいと思う。

そして、AHF内の未加盟国をIHFに仲間入りさせる努力にはげむのが、今や〝アジアの過去の盟主〟にすぎなくなった日本の唯一の姿勢と考えるのだが——。

（NHK運動部）

モントリオールへの道

37年部創立以来、強豪の名を欲しいままにしていた女子界の名門・田村紡績(三重)が、会社側の経営事情によって、昨年くれの全日本総合選手権を最後に、姿を消した。(本誌20頁参照)。

こうしたケースは、ハンドボールに限らず、各競技でも前例があるが、今回の場合、田村紡のオーナー・田村正衛氏が、日本協会会長という要職に就いていられるかただけに、内外の注目は、特に強いものがあった。

田村氏は、オーナーの立ち場で『不況のため、断腸の思いながら部活動をやめることにした』と語り、そのあとで、オーナーとも会長とも、どちらともとれる立ち場から『日本のハンドボール(女子)が、国際的に飛躍するには、中企業、小企業がチームをかかえていてはダメだ大企業による強豪チームが、トップ層を占めなければならぬ』『オリンピックや世界選手権でメダルをとるには、アマチュアとして許される限界の〝環境〟が与えられなければならない』などを発言。「不況」以外にもチーム解散の遠因が氏の胸中にあったことをにおわせた。

オリンピック、世界選手権で最上位を目指すのは競技団体の一つの使命であろう。

しかし、それは口でいうほど簡単ではなく、とりわけチームゲームでは、全体主義国家の国威をかけての姿勢に対抗する手段を見つけ出すのは、容易なことではない

田村氏は、44年会長就任以来「アマチュアリズム」を強く打ち出し、企業チームの選手が仕事なかばで職場をはなれ練習などを行うことを好まず、学生チームも学業優先が建前だ、との意見を口にしていた。

それからすれば、あまりにも極端な〝変身〟だが、氏自身、それをはっきり認めている。

『欧州遠征などムリしてやるものではない、与えられた範囲で行動するのがアマチュア競技団体と考えていたが、躍進のためには、手ぬるいことを悟った。

ナショナル、単独を問わず可能性のあるチームは、積極的に行動すべきだし、企業は、選手(部員)にハンドボールに没頭できる環境と待遇を与えて欲しい』という。

情熱家、名会長といわれている田村氏の、この発想の転換は、単に頂点強化路線にとどまらず、日本協会の前途へ極めて大きな一石を投じることになる。議論を呼びそうだ。

(杉山)

市民ハンドボールの芽

49年度49、50年度46。なんの数字かお判りだろうか。

日本協会一般女子A登録チーム数である。

他の部門が軒なみ増の傾向のなかで、一般女子のこの現状は、どうしたものなのか、と探っているうちに、一つの微妙な〝作用〟に気がついた。

国体成年女子から学生を締め出したことが影響したのだ。

49年度まで、一般女子には一チーム3名まで学生が加わるのが認められていた。

それが、今年度から男子同よう参加できなくなり、いくつかのチームが店じまいし、登録しているチーム(クラブ)でも、実際に活動ができぬところが多い

この問題は、本誌135号の「東北国体評」で森恭一氏が、改善を要望されており、その後、筆者の近くにも中国地区のクラブ関係者から切実な訴えが届いている。

たしかに、現在の実業団を除く成年女子(OG)層の現状を分析すると、国体から女子学生をはずしたのは、思い切りがよすぎたと思う。

この決定をした48年11月の全国理事会(=本誌115号)では、「学生をはずすことによって、社会人に道が開ける」という意見が大勢を占めたわけだが、現実無視による机上の意見でしかなかった

女子高校生の大学進学率に目をやればすぐに判ったことなのだ。

日本協会首脳の間には「朝令暮改」を恐れるムードがあるようだが、拙い、と気がついたら青森国体(昭52)からでも改めたほうがいい。

まして、問題は、市民ハンドボールの芽をつみとることになりかねない〝内容〟だ。

それにしても、底辺の動きというものを明確に摘むのは、なんと難しいことだろう。

まだまだ、活動の底のほうで沈み、淀んでいる問題のなかに中央の手で、すくいあげなければならぬものがあるのではなかろうか。

当欄で再三説いているように日本協会が、市民ハンドボールを一つの型にはめこんでいく必要はまったくない。

市民ハンドボールは市民のものだからだ。

しかし、市民ハンドボールのかかえる課題は、日本ハンドボール界あげて考え、前進を打ち出す姿勢が欲しい。

今回の問題は「3チーム」「3人」だけで終る話ではないのである。

(Z)

世界へはばたけ日本のハンドボール

（協賛者御芳名・順不同）

株式会社 東口電機製作所
社長 東口武雄
奈良市二名町2603
TEL 0742—44—6161

中川石油株式会社
〒020 盛岡市菜園1丁目7番17号
電話（0196）23—(代)3241

医薬品並に健康関連総合商社
（株） 小田島
本社 花巻市上町6—5 〒025 TEL01982-3-5162(代)
営業所 花巻，盛岡，水沢，一関，大船渡，釜石，宮古，久慈，青森，八戸，弘前，むつ，仙台，石巻，古川，気仙沼，秋田，大館，横手

うつくしく うつくしく よりうつくしく
Wacoal
ワコール

コロナとマークIIの
岩手トヨペット
本社 盛岡市上田2丁目 TEL(51)3211（代）

株式会社 久保田鉄工
代表者 久保田広一
八尾市南本町四丁目九番一九号
TEL0729—23—0292

上田茂行

東海溶材株式会社
本社 清水市北脇242
支店 浜松市下石田町1743の1
営業所 小山，東京，相模原，三島，富士，三保，焼津，大井川，掛川，豊田，名古屋，四日市，大阪，富山，広島

株式会社 横山商店
横山豊
（第3回インターハイ準優勝清水商高主将）
清水市渋川468 TEL0543—45—3482

アサヒスポーツ
福井市松本3丁目4—2
TEL 0776—23—2555

広島県ハンドボール協会長
川上病院
広島市曙町2～33
TEL0822—61—3782

富士重工指定スバルサービス工場
（有） 野田商会
野田勉
（第9回インターハイ優勝清水商高選手）
清水市万世町1丁目69 TEL0542—52—6750(代)

学生衣料製造卸
株式会社 島屋
高岡市間屋町41

北陸電力株式会社
福井支店
福井市日之出1丁目4番1号 〒910
電話（0776）㉓1212番（代表）

屋内外電気工事設計施工
火災報知機設備施工
伊藤電機設備株式会社
代表取締役 伊藤仁和
福井市順化2丁目2番1号 〒910
TEL 営業部(0776)22-7800(代) 工事部21-2266(代)

ヨーロッパの味
タキザワハム
取締役社長 滝沢武

ブリヂストンタイヤ（株）彦根工場
〒 522-02
滋賀県彦根市高宮町211番地
TEL（07492）2-8111代表

不動産の カントラ 大阪・堺
TEL 0722—33—0003
0722—22—2103
フドウサン

成年男子（一般）24、少年女子14
佐賀国体の新配分数決まる

日本協会は、昨年12月13日の月例常務理事会（東京）で、今秋開かれる佐賀国体ハンドボール競技（10月24～29日・神埼町）の種別配分数を「成年男子一般24、同教員10、成年女子10、少年男子10、同女子14」と決めた。

佐賀国体は、開催地側の事情で総参加人員が、当初の予定より約二千二百人削減され、このため各競技とも、昨秋の三重国体参加数を確保できなくなった。

ハンドボールは68チーム（884人）と、三重国体（80チーム、千四十人）の15％減となり、日本協会はその配分について9月以来、検討を重ねてきた。（＝本誌135号参照）

47都道府県協会と全国理事会からの意向調査も行われるなどしたが、三重国体で新システムを確立したばかりとあって、意見がさまざまに分かれ、作業が難行。

特に、ローテーション（回転）を申し合わせている少年男女と成年男子（一般）とのからみは、各県の思惑ものぞかれ、10月以降の常務理事会では〝棚あげ〟の状態で進展をみなかった。

結局、12月の会議を前に、荒川理事長と嶋田総務担当常務理事によって、「成年男子一般32、少年女子18、その他各10」を基本としそれぞれ縮少する方向を打ち出し、各常務理事の了解を得たあと、別表のような配分を確定した。

◇

日本協会は当初、削減される12チーム分を成年男子一般にしわ寄せする考えを主体にしてきたようだが、少年女子を10に据えおいても成年男子一般の多数確保を希望する意見の強いことが判り、一方で少年のローテーションを2年目で早くも崩すことへの難色もあってその中間を採る結果に落ち着いた。

このため、少年女子2を割り当てられていた東北、北信越、中国四国の4ブロックが、前年なみに留めおかれる不運となった。

査定の根拠を、嶋田常務理事は「49年度の高校女子登録チーム数～北海道14、東北53、北信越32、関東166、東海99、近畿115、中国38四国26、九州75、佐賀4～によった」と説明している。

成年男子一般は、四国が1におさえられたのをはじめ、かってない〝狭き門〟となり、これを機にかねてからくすぶっていた教員との合併論が再燃しそうな気配である。

なお、佐賀国体の新配分は、昨夏7月31日の全国代議員会で執行部に一任されていたもの。

明年の青森国体は、80チームに戻る予定で、その場合、少年男女をどう取り扱うかは、2月下旬の全国会議（理事会、代議員会）で話しあわれる。

佐賀国体新配分数

	成年男子一般	教員	成年女子	少年男子	少年女子
北海道	1(1)	1	1	1	1(1)
東北	3(4)	1	1	1	1(2)
関東	4(6)	1	1	1	2(2)
東海	2(3)	1	1	1	2(2)
北信越	2(3)	1	1	1	1(2)
近畿	4(5)	1	1	1	2(2)
中国	3(3)	1	1	1	1(2)
四国	1(2)	1	1	1	1(2)
九州	3(4)	1	1	1	2(2)
佐賀県	1(1)	1	1	1	1(1)
計	24	10	10	10	14

（ ）内の数字は48年11月の全国理事会で内定していた削減前の配分数

「実習助手」教員の部出場へ

日本体協は、これまで国体教員の部（成年男子）に、出場資格のなかった「実習助手」の参加を認めることになり、各競技団体へ通達した。

（注）非常勤講師、事務職員はいぜん教員の部に出場できない。

また、今回の決定により「実習助手」は、教員の部以外のチームには加わることができなくなった。

代議員変更

青森協会はこのほど同協会代議員を鹿内一胤氏から斉藤浩氏に変更。

また、大阪協会は他界した野原成之亮氏の後任として、当分の間山田計氏を代行に立てることを決めた。

宮崎協会の富永篤美代議員はこのほど辞任された。後任は未定。

要望多い「全県参加」「種別設定」

宿題になっていた佐賀国体の種別配分は、どうやら別掲のとおり落ちついたが、今回、日本協会が、各都道府県協会にあてて行った意向調査（アンケート）で、改めて国体のありかたを問いなおす意見が、多数提言され注目を集めている。

特に、目立つのは、80チーム（最高値）の配分を『47、11、11、11』に分けて、4部門のローテーションを望む声である。

現在、ハンドボールは、成年男子一般、同教員、成年女子、少年男女の5種別で実施しているが、このうち、成年男子教員を同一般に吸収して、4種別に再編成、前掲の数字で1年ごとにローティション（回転）させるというものだ。

このシステムを採ると、全都道府県が、毎回必ずいずれかの種別に1チームを送りこむことができるわけである。

アンケートの動向からすればすぐにでも可決できそうなムードだが、問題は①「教員」存続のメリットがまだ残っている②47チームの場合、ダブルヘッダーを一日組まぬと5日間で全試合（47戦）を消化できない、ことだ。

このうち①は反論も強く、一部の教員チームはすでに「国体再編成のためなら、やむを得ない」としているので、〝解決〟の糸口はあるが、②は荒天などを考え、日本協会執行部内に難色を示す空気がある。

しかし、荒川理事長が、48年11月の全国理事会で『全県参加種別の設定は、今後研究していく』と語っていることもあり、来年の青森国体から、4種別に踏み切って欲しいと期待するムキもある。

このほか、女子学生の参加復活や、単独企業チームの辞退などを要望する意見が多い。

2月の全国会議が注目される

大同製鋼、3年連続の「3冠王」

女子は日本ビクターが3度目

全日本総合

大同製鋼（愛知）が、3年連続3冠王という大記録をうちたてた——今年度の日本チャンピオン・チームを決める第27回全日本総合選手権は12月9日夜の開会式（岸記念体育会館）につづいて10日から14日までの5日間、東京体育館で行われた。

16チームがしのぎをけずる男子は、大同製鋼の偉業成るか、が焦点となって進んだ。決勝リーグでは若さの中大（東京）、打倒大同に燃える湧永薬品（大阪）、上り坂の本田技研鈴鹿（三重）の強豪と火花をらす激戦が演じられたが、本田戦で引き分けにもちこまれたものの堅城はゆるがず、3年連続3度目の優勝を飾るとともに、48年度、49年度につづいて今年度も、全日本3大タイトル（全日本総合、全日本実業団、国体）の独占に成功した。史上初の快挙である。

女子は12チームが参加、トップレベルの実業団各チームが主力を世界女子選手権へ送り、手うすな陣容となったため、淋しさはかくせなかったが、若手の活躍で盛りあがり、結局、日本ビクター（茨城）が2年ぶり3度目の栄冠を飾った。（観衆＝第1日・一千。第2日・八百。第3日・九百。第4日・一千六百。第5日・二千三百）

男子予選トーナメント

日体、後半に離される
清水高、湧永に善戦

▽1回戦

湧永薬品（実連・大阪）30（15－5、15－9）14 清水高（高体連・千葉）

得	【湧永】		【清水】	得
0	今井	GK	板橋	0
0	福井	GK		
2	大山	FP	石川	2
15	穂積	FP	仲田	4
4	津川	FP	小松	2
2	松本	FP	山口	3
1	戸田	FP	森川	2
5	高橋	FP	島越	0
0	菅	FP	清水	1
1	森	FP	鈴木	0
0	木野	FP		
30	(3)	PT	(0)	14

（審・斉藤、千野）

大崎電気（実連・埼玉）21（6－9、15－3）12 海上下総（自衛隊・千葉）

本田技研鈴鹿（実連・三重）31（19－6、12－6）12 法大（開催地・東京）

三陽商会（実連・東京）26（13－7、13－7）14 大阪教員（教職員連・大阪）

＝以上Aコート

大阪イーグルス（教職員連・大阪）29（16－8、13－4）12 三春台クラブ（全国社会人東地区・神奈川）

中大（学連・東京）27（13－10、14－6）16 京都クラブ（全国社会人西地区・京都）

三景（日協推・東京）24（14－10、10－7）17 大阪体大（学連・大阪）

大同製鋼（日協推・愛知）25（13－6、12－10）16 日体大（学連・東京）

＝以上、Bコート

○……Aコート注目の本田×法大は、法大の動きをじっくりとみた本田の手固い攻守が際立ち、思わぬ凡戦に終った。

法大はエース村田（全日本）がいつものように射って出て、本田を速いペースに引きこもうとしたが攻め口が多彩になった本田は速攻セットを使い分け田上、矢野の活躍であっさり主導権を握り、特に後半は、先気をなくした法大守備陣をつぎつぎに突破、15分23－9と大差をつけた。

清水高が湧永相手に善戦した。前半6分3－4から9分荒地、12分石川で逆転、13分穂積（全日本）に同点とされたものの、すぐ仲田山口で優位を保つなどコートサイドを沸かせた。

20分を過ぎるあたりからそれまで遠慮勝ちだった湧永攻撃陣も、得意のゆさぶりを見せはじめ、主導権を奪い、後半は穂積の独り舞台となった。

○……Bコートでは、東西を代表するクラブ同士の一戦・大阪イーグルス（教職員1位）×三春台クに興味が集ったが、大阪の組織力が上廻り、前半なかばすぎから一方的な展開となった。

「学生チームは苦手」という大同に対して日体大は互格に試合を進め前半12－10とリードして終わったが、後半になると大同にようやくエンジンがかかり15分までに連続6ゴール、あっさり点差が開いた。

しかし、日体大のスピードある攻撃は迫力があった。後半の息切れが悔やまれる。攻撃的な展開が続き面白みの味わえる一戦だった。

中大、決勝リーグへ
三景、本田技研に敗れる

▽2回戦（決勝リーグ進出チーム決定戦）

湧永薬品 22（14－5、8－3）8 大阪イーグルス

全日本総合選手権審判団

▽審判長　安藤純光▽副審判長　清水正▽審判員　千野恒夫、狩野幸介、幸田末之、光島磯雄、森恭一、新村理文、大塚文雄、岡前義春、佐分正典、佐野和夫、斉藤実、住尾勉、山本孝男、由利弘

○……立ち上り大阪は池本、福井稔で幸先よく3－0とし、リズムに乗るかと思われたが、湧永はGK福井の好守でそのあと30分間追加点を与えず、攻めては11点を連取して主導権を握った。

大阪は、湧永の早いつぶしにあって、思うように動けず、無策のまま押し切られてしまった。

（青木敬子）

中大 18（10－7、8－7）14 大崎電気

○……若さの中大、巧さの大崎。序盤は大崎の老巧な展開が優位となり15分4－1としたが、中大も速攻を活かして25分蒲生（全日本）で同点、27分大熊で逆転、以後は大崎に一度もリードを許さなかった。

終盤、大崎は飯田（全日本）を中心に追いあげたが大勢をくつがえすまでには至らなかった。

（青木）

本田技研鈴鹿 15（9－6、6－5）11 三景

○……本田は佐藤（全日本）、新実

で相手守備陣を引きつけておいて長谷川、田上らに得点を狙わせた一方、三景は佐々木（全日本）の好配球を川島、加藤が活かして対抗、一転二転の好試合となった。

後半15分本田は11―9としたが三景も17分1点を返しいっそう緊迫。しかし、本田は22分佐藤24分長谷川で3点差をつけ、勝負を決めた。（由利　弘）

大同製鋼 18（9―5 9―3）8 三陽商会

○……三陽が拾て身の試合ぶりをみせれば、と思ったが、大同はさすがに巧者。食い下られてはやっかいとばかり、開始と同時にスパートをかけ、15分には早くも8―0と開いた。

三陽は、気をゆるめた大同の凡失につけこんで、後半5分6―9と粘ったが、そのあと再び大同の攻撃をうけた。（杉山　茂）

男子決勝リーグ

湧永、巧さで本田を制す

湧永薬品 12（7―2 5―5）7 本田技研鈴鹿

○……息詰まるような攻防がつづいて15分2―2。ところが、そのあとの10分間、本田守備陣の崩れをついて湧永が連続5ゴール、結局ここが勝負を決めるヤマ場。

5点のうち3点は、ベテラン木野（全日本）があげたもので、相変らず読みの深い巧技が賞される。

勢いにのった湧永は、後半も5分までに3点、10―2と予想に反して一方的展開となった。

本田はエース佐藤の調子が今ひとつのうえ、新実も単調にすぎ、湧永の巧さにしてやられた。（森　恭一）

【湧永】	得		【本田】	得
福井	0	GK	細野	0
今井	0	GK	牧原	0
木野	4	FP	佐藤	1
高橋	3	FP	田上	1
戸田	2	FP	新実	1
穂積	1	FP	柳	1
津川	1	FP	長谷川	1
松本	1	FP	喜井	1
森	0	FP	金子	1
大山	0	FP	勝田	0
菅	0	FP	宮川	0
市原	0	FP	矢野	0
12（0）		PT		（0）7

中央及ばず

大同製鋼 19（8―4 11―6）10 中大

○……今季、公式戦22勝1分という中大の試合ぶりに関心が集ったが、大同のスピーディな攻守が冴えて、前半22分7―1と点差があき、中大は後半4分6―9と追ったのが精いっぱい。

【大同】	得		【中大】	得
柳川兄	0	GK	田村	0
倉谷	0	GK	小松	0
藤中	2	FP	大熊	2
柳川弟	1	FP	戸田	3
中井	3	FP	蒲生	1
松原	6	FP	西窪	1
花輪	1	FP	関	0
北村	0	FP	金沢	3
大原	1	FP	坪子	0
中本	2	FP	大林	0
野田	3	FP	中村	0
清崎	0	FP	大久保	0
19（1）		PT		（0）10

（審・光島　新村）

中大は、西窪が藤中（全日本）を徹底マークするなど、なんとか大同の攻撃陣を乱そうと企てたのだが、手をかえ、品をかえて切りこんでくる大同の攻め口に屈した

しかし、大同の勝因は多彩な攻めよりも、むしろ守りの固さにあった。

特に、学生の直線攻撃を考えた帰陣の速さは、中大にとって意外でさえあったろう。（杉山）

湧永薬品 17（9―4 8―8）12 中大

【湧永】	得		【中大】	得
福井	0	GK	田村	0
今井	0	GK	小松	0
津川	3	FP	西窪	0
穂積	6	FP	大熊	5
戸田	0	FP	戸田	2
高橋	4	FP	関	0
松本	0	FP	金沢	0
木野	4	FP	蒲生	5
森	0	FP	坪子	0
菅	0	FP	大久保	0
大山	0	FP	中村	0
市原	0	FP	大林	0
17（4）		PT		（3）12

（審・岡前　佐野）

○……湧永は最初から厳しいディフェンスで中大を圧倒し、着々と自軍のペースを造りあげた。

中大は湧永守備陣に組織攻撃を絶たれ、肝心なところでのパスミスも目立った。

後半、どうにか攻撃がまとまりはじめたものの、10分8―14では追いこみ切れず、前半の拙攻に泣いた。

湧永は有利な展開に余裕をのぞかせ、巧者揃いらしいところを存分に発揮した。（青木）

残り32秒、大同回生の同点

大同製鋼 15（4―6 11―9）15 本田技研鈴鹿
引き分け

【大同】	得		【本田】	得
柳川兄	0	GK	細野	0
倉谷	0	GK	牧原	0
藤中	8	FP	田上	2
柳川弟	2	FP	柳	0
中井	2	FP	佐藤	4
松原	2	FP	新実	4
花輪	1	FP	長谷川	0
野田	0	FP	金子	3
北村	0	FP	喜井	0
大原	0	FP	矢野	1
中本	0	FP	勝田	0
清崎	0	FP	宮川	1
15（3）		PT		（2）15

○……残り2分で15―12。本田の勝利は動かないとみえた。

28分30秒、大同は藤中がPTを決めたが、まだ2点差。

悲鳴に近い声援が両チームにとぶ。かつてない雰囲気だ。

大同は、最後の望みをかけてオールコート・アタック。

それは、久しく見せたことのない王者の狼狽でもあったのだが、浮足だったのは、むしろ本田である。

○……喜井が無用のラフプレーで2度目の警告をうけて退けられ、

歴代ナショナルチャンピオンチーム

		【男子】	【女子】
	昭12	大塚ク（東京）	……
	昭13	日体（東京）	……
	昭15	日体（東京）	倉敷高女（岡山）
	昭17	日体ク（東京）	倉敷高女（岡山）
		～以上　戦前の全日本選手権～	
①	昭25.2	日体桜（東京）	愛知ク（愛知）
②	昭25.11	スワロー松（東京）	全山梨（山梨）
③	昭26	スワロー（東京）	芙蓉ク（東京）
④	昭27	セントポールA（東京）	（休会）
⑤	昭28	全日体大（東京）	全静岡城北高（静岡）
⑥	昭29	全日体大（東京）	全静岡城北高（静岡）
⑦	昭30	西日本日体ＯＢ（福岡）	水海道二高（茨城）
⑧	昭31	全日体大（東京）	半田高（愛知）
			～以上11人制～
⑨	昭32	全日体大（東京）	愛知紡績（愛知）
⑩	昭33	全日体大（東京）	愛知紡績（愛知）
⑪	昭34	芝浦工大（東京）	愛知紡績（愛知）
⑫	昭35	芝浦工大（東京）	愛知紡績（愛知）
⑬	昭36	芝浦工大（東京）	愛知紡績（愛知）
⑭	昭37	大崎電気（東京）	愛知紡績（愛知）
		～以上11人制～	
⑮	昭38	立教大（東京）	大洋デパート（熊本）
⑯	昭39	大崎電気（埼玉）	大崎電気（埼玉）
⑰	昭40	大崎電気（埼玉）	大洋デパート（熊本）
⑱	昭41	全立教（東京）	大崎電気（埼玉）
⑲	昭42	大崎電気（埼玉）	田村紡績（三重）
⑳	昭43	全立教（東京）	大洋デパート（熊本）
㉑	昭44	全立教（東京）	大洋デパート（熊本）
㉒	昭45	大崎電気（埼玉）	大洋デパート（熊本）
㉓	昭46	大崎電気（埼玉）	日本ビクター（茨城）
㉔	昭47	湧永薬品（大阪）	東京重機工業（東京）
㉕	昭48	大同製鋼（愛知）	日本ビクター（茨城）
㉖	昭49	大同製鋼（愛知）	東京重機工業（東京）
㉗	昭50	大同製鋼（愛知）	日本ビクター（茨城）

あと1分、ダメ押しを狙った新実のシュートもはずれた。大同一気の速攻は、柳川弟（全日本）のゴールとなり14−15。
この時点でも、本田はいぜん有利だったハズ。
ところが、攻めるともキープするともつかぬ中途半端なパスプレーを見せたため、大同につけこまれ、残り32秒苦しまぎれのパスが中井(全日本)のカットにあい、そのまま同点シュートを射ちこまれてしまった。
○……いつになくボンヤリしたプレーの多い大同をついて本田は終始、自分のペースで試合を進めながら、最後の2分間は、考えられないような拙攻であり、拙守だった。
そこを見逃さなかった大同の粘りはたいしたものだが、内容は完全に〝負け〟である。（杉山）

中大の反撃に沸く

本田技研 13（8−6, 5−6）12 中大

【本田】	得		【中大】	得
GK 細野	0		GK 田村	0
牧原	0		小松	0
FP 長谷川	0		FP 西窪	2
柳	1		蒲生	4
田上	1		戸田	1
新実	7		大熊	4
矢野	0		金沢	1
金子	2		関	0
喜井	2		足立	0
宮川	0		坪子	0
務田	0		大林	0
豊岡	0		大久保	0
	13（3）	PT	（2）12	

（審・由利・森）

○……残り10分を切ってからの中大の反撃は、すさまじいものがあった。点差は7−12、ここでプレス気味の守りを布いたのが奏効した。まして、本田には前夜の苦い思いが残っている。
20分のPTに始って21分蒲生、24分西窪、25分PT、そして26分30秒場内の大歓声をあびて大熊が速攻を決め、同点(12−12)とした。
佐藤を負傷で欠く本田は、新実がマークされると一発がないだけに苦しい。
後半なかばから、まったく得点機をつかめずにいたが、28分やっとPTを拾い、田上がゴール。どうにか中大を振り切った。
中大は、前半なかば3−4のあとシュートミスがつづいて20分3−7とはなされたのが響いた。
（佐分正典）

大同、完ぺきな守り見せる

大同製鋼 14（6−3, 8−5）8 湧永薬品

○……大同は、史上特筆されるべき「3年連続3冠王」の偉業を、完ぺきな攻守で飾ってみせた。

【湧永】	得		【大同】	得
GK 福井	0		GK 柳川兄	0
今井	0		倉谷	0
FP 木野	2		FP 中井	3
戸田	0		花輪	3
高橋	3		藤中	1
穂積	2		松原	2
津川	0		北村	0
松本	0		柳川弟	3
森	1		野田	1
大山	0		中本	1
菅	0		守田	0
市原	0		大原	0
	8（2）	PT	（3）14	

（審・佐野・岡前）

特に、守りの強さは絶讃に価する。
前半5分から13分間、後半2分から15分間、1点も許さずに守り切ったのは、苦しい局面の直後だっただけに大きかった。
○……最大のヤマ場は、後半41秒湧永が穂積のゴールで4−6としたあとの守りだろう。
もしここで点差をさらに詰められていたら、今大会の両チームの出来からみて、勝敗の行方は変わっていたかもしれない。
大同ディフェンスはよく耐えた。そして、マイボールを得るや一気に攻めこんで5分中本、8分松原(全日本)、13分花輪(全日本)、14分20秒中井が得点をあげ10−4としたのである。
○……湧永もけして悪いデキではなかったが、あまりにも理詰めに攻めすぎたと思う。
もう少し「ムダな走り」があっ



大同、3冠王の主役・FN砲奮戦

（写真上）中大戦でみせた藤中③の豪快な攻撃（的場益雄氏提供）
（写真下）本田戦を救った中井の巧技（撮影・山田真市）



◇大同製鋼・3年連続3冠王の記録

▽昭和48年度		
7月	全日本実業団	4勝1分(得113, 失60)
10月	千葉国体	4戦全勝(得100, 失51)
12月	全日本総合	5戦全勝(得135, 失76)
	(6月, 全日本選抜〜現在廃会〜優勝)	
▽昭和49年度		
6月	日本実業団リーグ	4勝1敗(得106, 失64)
10月	茨城国体	4戦全勝(得 80, 失41)
12月	全日本総合	5戦全勝(得106, 失63)
▽昭和50年度		
6月	日本実業団リーグ	7戦全勝(得144, 失91)
10月	三重国体	5戦全勝(得123, 失61)
12月	全日本総合	4勝1分(得 91, 失57)
	通算45戦42勝2分1敗 (得998, 失564)	

てもよかった。

案外こうした策が、突破口となるものなのだ。

15分すぎ、ベテラン森を送りこみ、その森がすぐ1点をとったのをみても、相手のリズムを狂わすことはもちろん、時には、自らのリズムも変えてみる必要がある。

すべてを知りつくした両チームのかけ引きが、近来にないコクのある決勝戦に仕立てた。

なお、大同はこれで湧永との公式戦に12連勝である。

（荒川清美）

大同製鋼・中浜監督の話 故障者が多く苦しい大会だった。それだけに、この3年間でもっとも嬉しい優勝だ。

ウチの力は下り坂だけに、来年はもういちど一から出直したい。

小松市女高、ブラザーに惜敗

女子予選トーナメント

▽1回戦

東京重機（日協推・東京） 7（4—2 3—1）3 佐賀ク（次年度国体開催地・佐賀）

日本ビクター（日協推・茨城） 12（5—3 7—1）4 日体大（学連・東京）

田村紡（実連・三重） 13（8—6 5—5）11 東京教大（開催地・東京）

ブラザー工業（実連・愛知） 10（5—1 5—6）7 小松市女高（高体連・石川）

＝以上、Aコート

得	【ブエ】		【小松】	得
0	井戸田	GK	酒谷	0
0	山本	GK	西川	0
3	原川	FP	庄田	0
1	佐々木	FP	中山	0
0	中川	FP	本田	1
4	小森	FP	山下	0
1	木下	FP	千歩	5
1	宮平	FP	木戸	1
0	山中	FP	小野	0
0	楠石	FP	西出	0
0	山口	FP	八木	0
0	国府	FP	渡辺	0
10	（1）	PT	（3）	7

（審・狩野 幸田）

大崎電気（実連・埼玉） 17（6—3 11—4）7 徳山ク（全国社会人・山口）

立石電機（実連・熊本） 13（7—5 6—7）12 東京女体大（学連・東京）

＝以上、Bコート

○……Aコートでは、大学勢の食い下りに期待をかけられたが、主力を欠くとはいえ、試合かけ引きに秀れたビクター、田村紡が、部分的に苦戦の場面はあったにせよ最後は勝利を手中におさめ、改めて実業団—学生の〝差〟を浮き彫りにした。

佐賀クは岸川の攻撃力を活かして重機とせりあい、後半9分3—5、あるいはと思わせたが、そのあと決め手がなかった。

○……Bコートでは、学生1位の東女体大が、立石を苦しめた。

後半20分10—13から岩永、西峰で1点差とし、まだ3分間を残していたのだが、立石懸命の守りにあって逆転は成らなかった。

立石は後半1分8—5とはなしながら、そのあと得点が止まり、11分9—10と引っくり返された。その劣勢を中盤に、平下、池渕ではね返したわけだが、東女体大側からすれば、ここを持ちこたえられなかったのが敗因であろう。

小松市女は、ブラザーの当りの強い守りに戸まどいながら、後半は互角以上の健闘だった。

ブラザーは、前半20分までに連続5ゴールしたため、余祐を保てたが、後半にみせた千歩を切り札にした小松の攻撃が、仮に序盤から発揮されていれば、かなりあてたハズだ。

徳山クは後半10分12—4と離されて散った。全国社会人代表の出場権をめぐって論議もあるらしいが、情熱のかたまりのようなチームが乗りこんでくる道を、まだまだ断ち切ってはなるまい。

重機、ブラザー降し〝面目〟
田村紡、三冠の夢消ゆ

▽2回戦（決勝リーグ進出チーム決定戦）

東京重機 7（2—1 5—5）6 ブラザー工業

○……総勢7人、働き手2人を欠く重機に対し、主力健在のブラザー。しかも三重国体2位と上り坂だけに、誰の目にもブラザー有利と映った。

ところが、策にこだわりすぎて攻撃が単調、後半16分までの41分間にわずか1点という貧攻だった。

重機も、市川のリードで好機をつかみながら思うにまかせず主導権を握れなかったが、後半、村上がFTから積極的に射ちこみ連続3点、さらに13分横山、15分市川とたたみかけて7—1。

このあとブラザーは、眠りからさめたように反撃したが、24分35秒6—7としたまでで及ばなかった。

チーム編成に苦しみ、大会前、いちどは棄権を考えた重機だが、気力をみなぎらせたこの1勝で、前年優勝の面目は充分保たれたといえる。

（滝口三郎）

日本ビクター 5（3—1 2—1）2 大崎電気

○……大崎は1分中村で先行したが、ビクターは10分までに2点をあげ、さらに17分蓮見がゴール、優位に立った。

ビクターは後半も1分PTで点差を拡げたが、その後は互いに決め手を欠き、盛りあがりのないままに終った。

（山本孝男）

立石電機 11（4—5 7—3）8 田村紡

○……前半15分を過ぎてから活気づき好テンポ。後半10分7—7のあと立石は平下、池渕で先行、田村も20分三毛で8—9と追いあげ

たが、速攻ミスを立石に拾われ手痛い失点がつづき敗れた。（荒川）

女子決勝リーグ

重機の2連勝は成らず

日本ビクター 9（5－4 4－0）4 東京重機

【重機】	得		【日ビ】	得
三紙	0	GK	鈴木	0
市川	1	FP	蓮見	0
折口	0		斉藤	0
村上	2		小島	4
町田	0		染谷	0
横山	1		滝本	0
寺田	0		池田	3
			高野	1
			飯田	1
			羽鳥	0

（審・幸田・狩野）

9（4）PT（0）4

○……重機は、ビクターのフェイントプレーに対するマークが甘く荒い守りをみせて再三PTをとられたのだが、ビクターが不調で1本しか決められなかったため、点差をはなされずにすんだ。

しかし、ビクターは19分、久々にユニホームを着たベテラン飯田（旧姓八重樫）が巧みに勝ちこし点を奪い、後半は、小島が連続3本のPTを決める一方、完ぺきな守りで、重機を振り切った。

ともに主力を欠き、決勝リーグとしては物足りぬ内容だった。

（斉藤　実）

立石電機 7（3－1 4－0）1 東京重機

○……互いに手の内を知りつくした同士だったが、個人技に優る立石が、チャンスを功く活かして押し切った。

【重機】	得		【立石】	得
三紙	0	GK	丸山	0
市川	0	FP	篠田	2
折口	0		加子崎	1
村上	1		池渕	2
町田	0		石井	0
横山	0		林	2
寺田	0		平下	0
			森山	0

（審・森・由利）

7（0）PT（0）1

重機は前半16分1－1のあとのPTを気負いすぎてはずしてからは、ほとんど好機をつかめず、後半のロング多用も裏目に出て、立石に反撃のチャンスを与えてしまい、12分6－1と大勢が決まった。

（新村理文）

ビクターの先制攻撃利く

日本ビクター 11（6－3 5－4）7 立石電機

【立石】	得		【日ビ】	得
丸山	0	GK	鈴木	0
篠田	3	FP	蓮見	1
加子崎	0		斉藤	2
池渕	4		小島	2
石井	0		染谷	0
林	0		滝本	0
平下	0		池田	4
森山	0		高野	0
			飯田	2
			羽鳥	0

11（3）PT（3）7

○……接戦の予想が、立上りの巧拙であっさり勝敗の行方が決まってしまった。

ビクターは会員がよく走り立石守備陣を押しこんで池田、蓮見、高野らが矢次ばやにポイント、12分5－0と放した。

立石はロングシューターを欠くためカットイン、ポストの繰り返しで、相手ディフェンスを切り崩せず、前半なかばすぎ3本のPTを池渕が決めて22分3－5としたものの、そのあと、再びビクターの斉藤、小島らにゆさぶられ、後半7分8－3と点差があいた。

終盤、立石は篠田の活躍で7－9まで追いすがったが、ビクターはあわてず、2点を加えて振り切った。

（森　恭一）

日本ビクター・池田監督の話

攻守の要を4人も欠いていたのでとても優勝できるとは思わなかった。

小島、斉藤の両選手が頑張ってくれたのが大きい。

投書欄　明日への提言

主力抜きの全日本総合（女）は疑問

今年の全日本総合選手権は、オリンピック前年のせいか、マスコミの関心も高かったようで事実私が観た最終日も、なかなか活気があったが、疑問を感じたのは、主力抜きの女子を施行したことである。

世界選手権の日程は、かなり前から発表されているのだし、第一、今年のようなケースは、過去にも一度か二度あったハズだ。

にもかかわらず、日本協会が男子と同時開催したのは、理解に苦しむ。

日本協会の事業に柔軟性がないのは、感心したことではなく、いかにも計画性に乏しい印象をうける。

オリンピックや世界選手権とまではいかなくても、せめて、2年程度を一単位としたスケジュールを組み立てるべきではないのか。

【東京・匿名希望】

日本でも「世界選抜戦」を

僕は中学のハンドボール部員ですが、機関誌で紹介されている世界オールスターズの試合が、是非、日本でも行われるよう計画して欲しい。

また、このような試合のテレビ放映は望めませんか。いずれも、ハンドボールの人気をあげることに役立つと思う。

世界オールスターズの一員に本田技研の佐藤選手が選ばれて辞退したようですが、国体よりも、世界の試合に出るべきだったと思う。

【河田　豊】

※…河田君、住所をご連絡下さい

女子4～6位決定リーグ

（予選トーナメント2回戦敗者による）

ブラザー工業 14（9－5 5－3）8 田村紡

大崎電気 10（5－5 5－6）10 田村紡
引き分け

ブラザー工業 8（2－1 6－4）5 大崎電気

○……ブラザーというのは不思議なチームだ。

2試合とも後半の鋭い動きは、前半の低調からとても想像できないホドだし、「決勝落ち」さえ信じられなくなってくる。

〝お天気屋〟なことは白神監督も、じゅうぶん承知なのだが良薬がないらしい。

大崎は、久々に粘りがのぞいた田村紡は、電撃的な〝解散〟で、この大会が最後の舞台となった。

42年の全盛期を思わす迫力を感じさせ、第2次黄金期ともいえる今シーズンだっただけに惜しい。

【男子決勝リーグ】

	同	湧	本	中	P	得	失	
①大同製鋼	…	○	△	○	5	48	33	
②湧永薬品	●	…	○	○	4	37	33	
③本田技研	△	●	…	○	3	38	46	☆
④中大	●	●	●	…	0	31	42	

【女子決勝リーグ】

	ビ	立	東	P	得	失	
①日本ビクター	…	○	○	4	20	11	
②立石電機	●	…	○	2	14	12	☆
③東京重機	●	●	…	0	5	16	

【女子4～6位決定リーグ】

	ブ	大	田	P	得	失
④ブラザー	…	○	○	4	22	13
⑤大崎電気	●	…	△	1	15	18
⑥田村紡	●	△	…	1	18	24

～田村紡績最後の大会に～

全日本総合選手権に拾う

不況の波まともに……

□……強豪・田村紡(三重)が、この大会をもって14年間の活動に終止符を打つこととなった。

大会第4日の会場で、オーナーの田村正衛氏(日本協会々長)が、記者団に明きらかにしたもの。

37年デビューと同時に、全日本総合3位となり、42年度には全日本4大タイトルを独占、田村紡時代を築きあげた。

しかし、不況の波をまともにかぶり、経営合理化をせまられていた田村氏は一昨年あたりから休部を考えていたが、日本協会々長という立ち場にあることや地元国体の有望種目として期待がかけられたため延ばされた。

スピーディなパス展開と、出足のよいディフェンス。女子界に〝速さ〟を持ちこんだ功績は大きいし、最後まで一軍を引っぱっていた三毛直子選手の人柄のよさがそのままチームカラーとなって、他チームの選手にこれほど好感をもたれていたチームも珍しい。

東京最後の夜、選手たちは、東京重機の合宿所で楽しく過した。

全試合を終えて帰り支度する選手を、重機の部員たちが〝別れ〟を惜しんで引きとめたのだ、という。

(田村紡の優勝記録)▽全日本総合=42年▽全日本実業団=41、42、50年▽国体=40、41、42、50年▽全日本選抜(現在廃会)39、40、42年▽東海=9回▽東海室内=11回▽東海実業団=9回

傷だらけの大同主力陣

□……3年連続3冠王という快記録を樹てた大同製鋼(愛知)だが、まさにそれは〝傷だらけの栄光〟だった。

藤中(右肩)、中井(左肩)、花輪(右足首)と、全日本トリオの故障が治り切らぬうちに大会を迎え、第3日からGK柳川兄が扁桃腺をはらして39度前後の発熱、決勝の湧永戦では松原が右足首をひねり応急処置をうけての出場——と、控室はまるで病院の待合室みたいなもの。

それだけに、「この3年間もっとも苦しい大会だったし、嬉しい優勝」(中浜大輔監督)ということになる。

来年の目標は、という記者団の質問に、主力選手たちが「まずケガを治すこと」といったのは実感がこもっていた。



チーム編成に一苦労

□……女子の上位へ進んだ実業団各チームは日頃から少数精鋭主義を採っているうえ、世界選手権のため、柱を二本、三本と引き抜かれて、陣容を整えるのに一苦労。

クイーンとなった日本ビクターは、額賀ら三人の穴を、結婚などですでにユニホームを脱いでいる飯田(旧姓八重樫)、高野、それに名マネジャーだった羽鳥(旧姓笹沼)の三人に〝現役復帰〟してもらって埋め、「身体がもたないワ」というベテラン池田(監督夫人)はついにフル出場。

総勢10人という東京重機(東京)はもっと大変。古佐原、菊地を抜かれて、7人を確保するのがやっと。前回、8人で優勝して話題となったが、今回はさすがに力つきた。

〝国際公認球〟がアダ?

□……高校界で無敗を誇り、二度目の高校二冠(全日本高校、国体)を飾った小松市女高(石川)は善戦空しく惜敗。

谷口俊春監督は「全国高校界の代表として良い試合をしてくれればよいと思っていたので……」とサッパリした表情だったが、「試合球が、なれている国内向きのものなら、なんとかできたかもしれない」と口惜しさもチョッピリ。

ちなみにこの大会は、国内の公式戦で初めて国産の国際公認球が使われた。

一方、男子の清水高(千葉)も、いきなり湧永薬品(大阪)と顔を合わせて散ったが、14点をもぎとる健闘に、賞讃の声が贈られた。

【カット写真=名門・田村紡はこの大会が〝最後〟となった。対立石電気、三毛の闘志あふれる攻撃ぶり。 (撮影・山田真市)**】**

世界へはばたけ日本のハンドボール

（協賛者御芳名・順不同）

日本ハンドボール史編纂資料提供のお願い　第1回分

2月2日は日本ハンドボール協会の誕生日。昭和13年のこの日、それまで日本陸上競技連盟が持っていた内外への代表権が「日本送球協会（当時の名称）」に譲渡され、本格的なスタートを切ったものです。

以来38年の歳月が流れ、「日本ハンドボール史」も波乱に富んだページを綴っていますが、近年、その集大成を望む声が高まっています。

日本協会でも、来年度事業から、日本ハンドボール史の編さんを恒久化することに内定とりあえず機関誌編集委員会によって、資料の収集を心がけることとなりました。

しかしながら、過去に、この事業を計画化、組織化したことがないため「0」から出発せざるを得ないのが実情で、機関誌読者を通じ、多くのかたがたの協力を求める以外に方法を見出せません。

今回を「第1回」に、逐次、項目にしたがい資料・情報の提供をお願いいたします。ご支援下さい。

◇　◇　◇

「日本ハンドボール史編さん資料」提供の第1回分として、次の6項目につき、諸賢の協力をお願いいたします。

① **大正11年（一九二二）日本体育学会夏季講習会の資料**

ハンドボールが日本に初めて紹介されたのは、この講習会に於ける大谷武一氏（故人）の講演であったと云われる。同講習会の模様を伝える文献・写真を求めたい。また、同講習会受講者をご存知のかたはご一報下さい。

② **大正11年以降、昭和11年（一九三六）までの資料**

学校体育の教材として重視されたともいわれ、社会体育として注目されたともいわれた昭和初期のハンドボール（当時・送球）の活動を伝える文献・写真を求めたい。また、当事者をご存知のかたはご一報下さい。

③ **昭和3年（一九二八）、国際アマチュア・ハンドボール連盟設立に関する資料及び日本陸上競技連盟の名によって加盟した「日本」側の資料**

④ **ハンドボールを「送球」と命名したいきさつの文献**

⑤ ①に示すように、日本にハンドボールが初めて紹介されたのは大正11年の日本体育学会夏季講習会とされていますが、この定説を打ち消す新しい考証があれば、資料などを添えて、お教へ下さい。

⑥ 昭和11年までに行われた大会、試合の資料がありましたらお知らせ下さい。出場者をご存知のかたもご一報下さい

＊資料提供などにあたっての条件は、その都度協議することとします。
＊⑤については、特に心あたりがあって、資料提供をお願いするものではありません。
＊第2回は5月号に掲載の予定です。

日本ハンドボール協会（東京都渋谷区神南1-1-1　03―467―7097）

大同製鋼に「中部スポーツ賞」

中部地域の報道関係各社によって組織されている中部運動記者クラブは、昭和50年度「中部スポーツ賞」受賞者に、ハンドボール界のビッグタイトルを3年間にわたって独占しつづけている大同製鋼（愛知）を決め、12月17日名古屋で盛大な表彰式を行った。

同賞は中部運動記者クラブ加盟各社の投票によって選ぶもので、大同製鋼は全票（27社）獲得という圧倒的支持をうけた。

ハンドボール関係者が同賞を受けるのは初めてだが、スポーツジャーナリストの高い評価を得たことは、日本ハンドボール界にとっても大きな喜びである。

大阪イーグルスを推せん

日本スポーツ賞部門賞

日本協会は、昨年12月13日の月例常務理事会で、読売新聞社による恒例の「第25回日本スポーツ賞」の候補チーム（部門賞）として、全日本教職員選手権5連勝、国体教員3連勝の大阪イーグルス（大阪）を推せんした。

教職員界、クラブ界のチームが推せんされるのは初。また、大阪のチームが推されたのは第4回（昭29）の寝屋川高女子チーム以来21年ぶりのこと。

全日本学生は名古屋市

51年度の主要大会日程

日本協会は、昭和51年度の主要全国大会の日程を次のように確定した。

▽第27回全日本高校選手権、8月1～7日・富山県氷見市運動公園
▽第18回全日本教職員選手権、8月10～13日・青森県野辺地
▽第5回全国中学生大会、8月17～18日・大阪地区
▽第3回全国高専選手権、8月23～24日、新潟県柏崎市（〃予定）
▽第31回国体ハンドボール競技、10月24～29日・佐賀県神埼町
▽第19回全日本学生選手権、11月19～23日・名古屋市
▽第28回全日本総合選手権、12月8～12日・東京体育館

全日本実業団選手権は未発表。

全日本学生東西対抗は9月12または15日、金沢市の予定。

朴応喆氏が来日　韓国協会理事の朴応喆氏は、昨年12月18日来日。日本協会・荒川清美理事長をはじめ、全日本学連、全日本実連などの首脳と会談した。同氏の話では、韓国ナショナル（男）は若手が中心で、5年前のミュンヘンオリンピック予選（東京）時とはかなり代っている、という。

ＩＨＦ審判講習会 報告4

～「ハンドサイン」と「ＩＨＦペーパーテスト」～

安藤　純光
岡前　義春

18の「ハンドサイン」決める

ＩＨＦ・ＲＳＫ（Regel und Scheidsrechter Kommition）ルールとレフェリーの委員会は、一九七五年のオランダのシッタルドにおける会議でレフェリーのジェスチャーについて討議し「ハンドサイン」を決定した。

ノルウエー協会から提案された原案は全部で21のサインであったが結局18に集約された。

今さらジェスチャーの問題などと考えられるが、ハンドボール競技がますますスピーディになり円滑な競技運営をはかるためにジェスチャーの統一が必要となったのである。

内容的には現在行なわれているものと大同小異であるが、いづれのジェスチャーも明確でなければならない。そのためには**手または腕は少なくとも肩の高さまであげ**（警告、退場、得点のときのセンターレフェリーは、腕を伸してば高く上にあげる）**大きな動作で示さなければならない。**

1、（次頁の1を示す。以下同じ）ホールディング：ひじを横に張って相手を抱きかかえる形。

2、プッシング：片方のひじを横に張って左右に動かす。

3、ハッキング：片方の腕を前に伸ばし、他方の手でたたく。

4、警告：片方の腕で警を受けるプレイヤーを指し、他方の腕は手をにぎってこぶしをつくり高く上に伸ばす。

5、退場：片方の腕を高く上に伸ばし、2分間の退場のときには2本の指を、5分間の退場のときには5本の指を示す。

6、追放、失格：頭上で腕を交差する。

7、オーバーステップ：腕を前でまわす。

8、ヂャックル、ダブルドリブル：腕を前に伸ばし上下に振る。

9、フリースロー：片方の腕でポイントを他方の腕で方向を示す

10、スローイン：両腕を平行に前に伸す。

11、コーナースロー：コーナースローの行なわれるコーナーを指示する。

12、ゴールスロー：両ひじを横に張り手首から先は床を指す。

13、3ｍの距離：フリースローのときの3ｍを指示する。

14と15、得点：センターレフェリーは、片方の腕を高く上に伸ばす。ゴールレフェリーは片方の腕を前に伸ばし次のスローオフの方向を指示する。

16、レフェリータイム：頭上で「Ｔ」をつくる。

17、ストーリング：右手で時計をおさえる。

18、ゴールエリア侵入：ゴールエリアを指して左右に動かす。

ペーパーテストの概要

ＩＨＦは、国際審判員に関する制度を改革しようとしている。すでにブルガリアで行なわれた前回の研修会において提案されジェスロでの総会に議案として討議され裁決されている。

今回はこの中でレフェリーの講習およびペーパーテストの問題と評価について説明が行なわれ討議された。以下はその概要である。

レフェリーの講習は必ずテストをともなうものでなければならないし、すべての受講者はテストを受ける義務がある。

テストは（ａ）ルールのテスト、（ｂ）レフェリーの実技テストである。

ａ　ルールのテスト

試験官は解答用紙を用意し受験者は渡された用紙に姓名および国籍を記入し《解答》の欄に所定の問題用紙の正解の記号（ａ、ｂまたはｃ）を記入してその用紙を返す。試験官はその中の正解数を合計し、それに見合った評価を記入する。

正解10問以下では不合格

評価は点数制で行う。受験者はいずれも20問に答えなければならない。獲得した総合点を以下のように評価する。

正解数　18～20＝優秀。15～17＝優。13～14＝良。11～12＝可　10およびそれ以下＝不合格。

ｂ　レフェリーの実技テストは、観察用紙（採点表）に基いて評価する。

ｃ　テストは試験委員会によって総合評価されなければならない成績について書類を作成し、ＩＨＦ／ＲＳＫおよび講習実施の責任者である主管の審判委員会に提出し、さらに修正され評価される。

ペーパテストの問題は、№1～№5にわかれていてそれぞれに20の質問があり、下に2～3の答えがある。この中の正しいものを解答用紙に記号で記入するようになっている。以下は問題の№3である。

質問表　№3

1　ゴールポストおよびバーの色を塗る間隔は。

ａ　20㎝
ｂ　28㎝
ｃ　角が28㎝そして他の部分は20㎝。

2　ベンチには次の者だけが入れる。

ａ　交替プレイヤー5名とチー

ＮＨＫテレビスポーツ教室

今年度のＮＨＫテレビスポーツ教室は、日本協会技術部長・渡辺慶寿氏の指導で、3月6、13日の2日間放送される。

放送時間は、両日とも教育テレビ午後6時から7時まで。

安藤、岡前、佐野の3氏
ＩＨＦ公認審判員名簿

ＩＨＦ（国際ハンドボール連盟）は、このほど新しい国際公認審判員名簿を発表した。

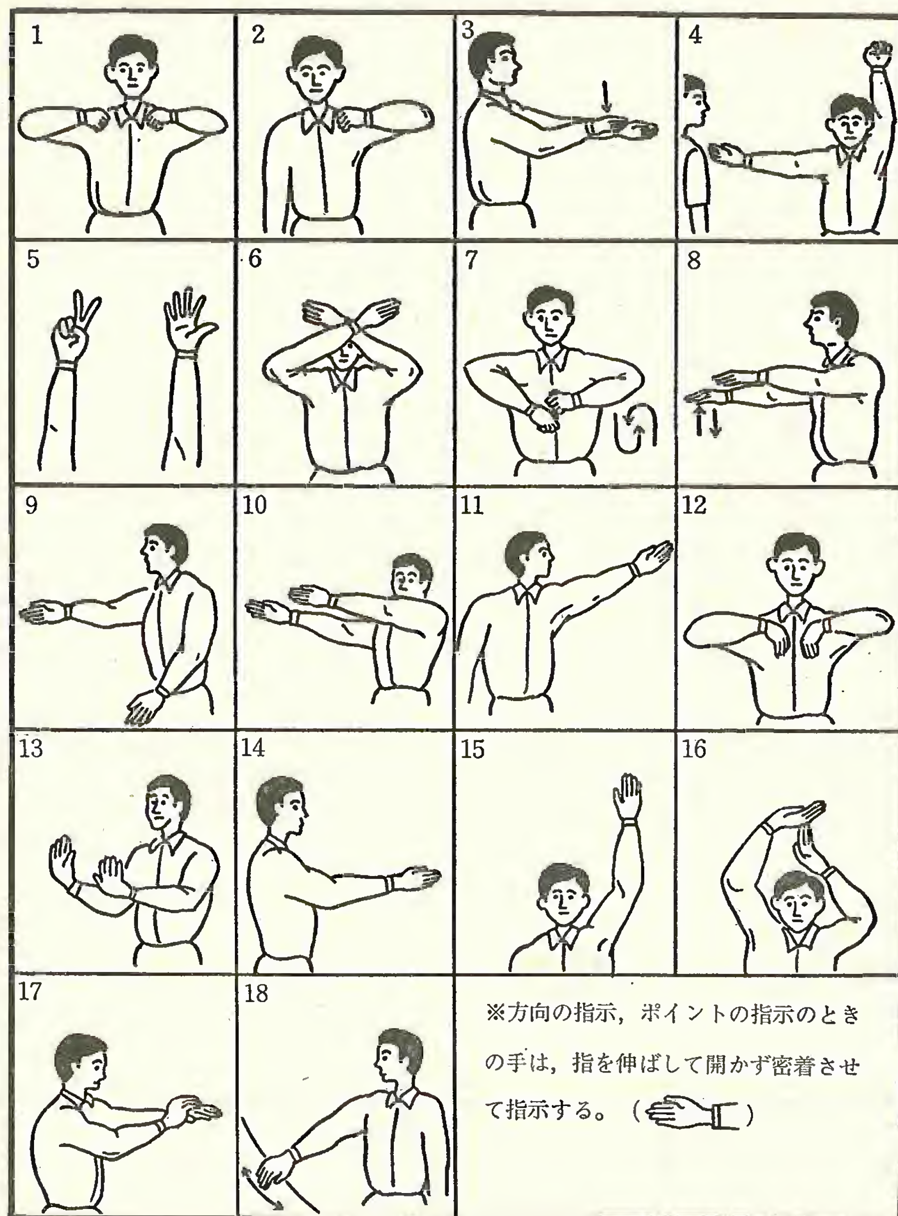
それによると、33ケ国239名がライセンスを受けており、日本からは、安藤純光、佐野和夫、岡前義春の3氏。

アジア地域では台湾4、イスラエル4、クウェート3、シリア4となっている。

ム役員4名
b 残りのプレイヤーならびにマネーヂャー、コーチおよび医師。
c 残りのプレイヤーならびにチーム役員4名

3 女子および少年用のボールは競技開始前に次の周囲と重量がなければならない。
a 周囲56～58cm、重量325～400g、b 周囲54～56cm、重量350～425g c 周囲54～56cm、重量325～400g

4 プレイヤーがプレイの進行中に競技場の外に出て、その直後に再び競技場に入った場合。
a これは競技場を去ったとみなされる
b これは競技場を去ったとはみなされない。



5 何回もくり返し誤った交替をした場合にはフリースローの他に、
a 2分間の退場の罰も加える。
b 5分間の退場の罰も加える。

6 ボールに脛または足で触れることは禁ぜられている。ただしボールが相手のプレイヤーによって投げつけられた場合は除く。足の反則はいつ罰せられるか
a 全く罰せられない。
b それによって利益を得ないとき。
c 必ず罰せられる。

7 相手を胴体で阻むことは許されている。
a たとえ相手がボールをもっていない場合でも、
b 相手を片腕あるいは両腕で抱きつくことも許されている
c また両手を使って阻止することも許されている。

8 ボールがゴールエリアラインに触れた場合。
a ボールはゴールエリアの中にあり、ゴールキーパーに属する。
b ボールはまだゴールエリアの中にあるとは認められず、したがってフィールドプレイヤーが触れてもよい。
c ボールはまだ完全にゴールエリアの中にはない。したがって防禦しているチームのフィールドプレイヤーが触れることもよい。

9 ゴールキーパーは、ゴールエリアの中ではボールをもって無制限に動くことができる。
a ただし、レフェリーが、プレイをおくらせるものと判断しない場合に限る。
b レフェリーがスローの笛を吹いた場合にも制限はない。
c レフェリーがプレイをおくらせるという理由で笛を吹いたときに限って。

10 ゴールキーパーが、コントロールされたボールを故意にゴールラインを越えてプレイすることは禁じられている。レフェリーの判定は。

a ペナルティースロー
b ゴールスロー
c フリースロー

11 1人のプレイヤーが高くとび上ってゴールエリアへ落ちた。しかしその前に彼はボールを味方のプレイヤーにパスした。パスを受けたプレイヤーは味方のプレイヤーがまだゴールエリアの中にいるのにシュートをした。このゴールは有効か。

a 無効である。
b 有効である。
c その味方のプレイヤーがゴールキーパーの妨害をしない場合に限って有効である。

12 レフェリースローは、ゴールエリアラインとフリースローラインの間においても行なうことができるか。

a どこでもできる
b フリースローラインのすぐ外で
c ある場合にはできる。

13 故意にくりかえされた違反の場合（第6条の8のすべての場合）には、レフェリーはただ単にフリースローの判断を下すだけではなく、さらに

a 反則をしたプレイヤーに警告もしなければならない、くりかえした場合にはそのプレイヤーを退場、または追放することもしなければならない
b 反則したプレイヤーを同時に退場または追放することもしなければならない。
c 反則したプレイヤーを同時に失格させるかまたは退場させることもしなければならない。

14 あるプレイヤーが3mの間隔を守らないために警告を受けたさらに後にそのプレイヤーは相手をおさえこむか、たたいたために2分間退場させられた。今彼はまた間隔を守らないために退場させられたとする。その罰はいかなるものとなるか。

a 5分間の退場
b 2分間の退場
c 5分間の退場の後失格

15 レフェリーは、競技をいつ打切ることができるか。

a 外に出されるプレイヤーが勧告にもかかわらず、競技場を去らない場合に。
b シュートがゴールポストに当ってゴールがこわれた場合に。
c 退場者が数多く出てその結果1チームのプレイヤーの数が5名以下に減った場合に。

16 ペナルティースローを行なうとき、笛の後でボールがスロアーの手から落ちた。そのボールを味方のプレイヤーがひろいシュートしゴールに入った。レフェリーは何を判定するか。

a ペナルティースローをやりなおす。
b ゴールイン
c 相手方にフリースローを与える。

17 相手を腕、手または脚を使って阻止することは許されているか。

a ボールをもっているプレイヤーだけを阻止してもよい。
b 禁止されている。フリースローあるいはペナルティスロー。
c 相手のプレイヤーが急速につきぬけるときには許される

18 ボールを投げてから防禦側のプレイヤーがゴールエリアに入ることが許されている。

a 許されない。フリースローあるいはペナルティースロー。
b 許される。ただしこれが相手にとっていかなる不利益の因にならない場合に限って。
c 許されない。フリースロー。

19 1プレイヤーの退場時間が前半のハーフタイムの終りになってもまだ終らない。この場合いかに処置するか。

a 退場させられたプレイヤーは、退場時間の残りを後半のハーフタイムのはじめに退場していなければならない。
b 彼は後半のハーフタイムのはじめからプレイすることを許される。
c 彼の退場の時間はそのハーフタイムの間に終る。したがって彼は後半のハーフタイムのはじめからプレイすることを許される。

20 1プレイヤーが3mの間隔を守らなかったために2分間退場させられた。後に同一プレイヤーが相手に抱きついたために2分間退場させられた。今彼はまた3mの間隔を守らないために退場させられることになった。レフェリーの判定は。

a 2分間の退場。
b 5分間の退場。
c 5分間の退場の後、失格。

◇

以上はIHF/RSKの国際審判員認定テストのルールに関する問題の1例である。このような方式はすでに国内においてもA級、B級申請者に対して実施されている。

設問については大体同様であるが、問題の数と評価については日本ハンドボール協会の方がきびしいようである。

テストは英・独・仏語で行われる。

（了）

☆★☆★☆★☆

海外トピックス

杉山　茂
（NHK運動部
慶大ＯＢ）

フランス、今秋中国遠征へ

フランス・ナショナルチームが今秋11月上旬、中国（IHF未加盟）へ遠征することに内定した。

フランスのスポーツ紙〝レキップ〟が伝えているもので、3～5試合を行う予定という。

中国ハンドボール界が復活して以来、ヨーロッパチームが中国遠征するのは、49年8月のチミソアラ工業学院(ルーマニア)、50年3月のユーゴ・ナショナルについでフランスが3番目。

ソ連、東ドイツ破り優勝
～バルト海カップ～

第8回バルト海カップは、オリンピックイヤーのへき頭を飾るビッグトーナメントとして、1月7日から10日までの4日間、ストックホルムに強豪6カ国が参集して開かれた。

2組の予選リーグでは、予想どおり、ソ連、東ドイツが順当にトップとなり、両国による決勝は、ソ連が、後半巧みに試合を運んで優勝を飾った。ソ連は後掲のトビリシ国際につづき2連勝と好調。

オリンピック予選（18頁参照）の1次リーグで東ドイツを破り、注目を集めている西ドイツは5位に留った。

▽予選リーグA組

ポーランド　27―20　デンマーク
東ドイツ　25―12　デンマーク
東ドイツ　25―24　ポーランド

▽同B組

ソ　連　21―18　スウェーデン
スウェーデン　20―16　西ドイツ
ソ　連　19―16　西ドイツ

▽5位決定戦

西ドイツ　16（9―5、7―9）14　デンマーク

▽3位決定戦

ポーランド　25（1―1、2―1：12―12、10―10）24　スウェーデン

▽決勝

ソ　連　21（10―9、11―10）19　東ドイツ

ノルウェー、ユーゴ降す
～ポレールカップ～

「北極杯」と銘打って、1月12日から3日間、オスロを中心にノルウェー国際トーナメントが開かれ、地元ノルウェーがレイナートセン、テイルダルらの活躍で強豪ユーゴらをおさえて、優勝を飾った。

ノルウェー　25―20　フランス
ユーゴ　31―24　ブルガリア
ユーゴ　21―16　フランス
ノルウェー　30―21　ブルガリア
ブルガリア　26―20　フランス
ノルウェー　20（11―10、9―8）18　ユーゴ

【順位】①ノルウェー②ユーゴ③ブルガリア④フランス

ソ連、すばらしい攻守
～トビリシ国際～

恒例のトビリシ(ソ連)国際大会は、昨年くれ男子の有力チームが顔を揃えて行われ、各試合とも乱戦模様だったが、地元ソ連がすばらしい攻守でユーゴ、ルーマニアらを押し切り優勝を飾った。

主な記録次のとおり。

ポーランド　23（12―8、11―10）18　ルーマニア
ソ　連　20（13―7、7―6）13　ユーゴ
ソ　連　28（12―13、16―9）22　ポーランド
ユーゴ　29（15―15、14―14）24　ルーマニア
ソ　連　23（11―12、12―8）20　ルーマニア
ユーゴ　26（11―13、15―11）24　ポーランド
ユーゴ　22（7―12、15―10）22　ソ連新人
引き分け

【順位】①ソ連5戦全勝②ユーゴ3勝1分1敗③ポーランド3勝2敗④ルーマニア2勝3敗⑤ソ連新人1勝1分3敗⑥ジョルジア選抜5敗。

ルーマニア、順当勝ち
～スラスクカップ女子～

世界女子選手権最後の前哨戦となったスラスク・カップ女子国際トーナメントは、11月末、ポーランドで4カ国5チームによって行われ、ルーマニアがチエコと引き分けた以外、順当に勝ち進んで首位を決めた。

最高得点はマチソバ(チエコ)の24点、最優秀GKはマカラスコバ（チエコ）だった。

ルーマニア15―9　ポーランドJ
ポーランド18―17　チエコ
ポーランド24―8　ポーランドJ
ルーマニア19―14　スウェーデン
チェコ24―13　ポーランドJ
ポーランド18―13　スウェーデン
スウェーデン16―11ポーランドJ
ルーマニア　11（分）11　チエコ
チエコ14―13　スウェーデン
ルーマニア13―12　ポーランド

【順位】①ルーマニア②ポーランド③チェコ④スウェーデン⑤ポーランド・ジュニア

ヨーロッパカップ

男子第16回ヨーロッパカップは、22カ国の代表（選手権チーム）が参加して熱戦をつづけているが、昨年末までに1、2回戦を終わり、ベストエイトが出揃った。

予想どおり、VfL・グンメルスバッハ(西ドイツ)、ボラックバニヤ・ルカ(ユーゴ)の両強豪が順当に勝ち進み、イスラエル・チャンピオンのハポエル・レコボトは、シタルデイア・シタルト（オランダ）に14―21、12―14で敗れた。

また、女子第15回ヨーロッパカップは、近く1回戦5カードが行われ、不戦の3カ国を加えてベストエイトとなる。

カップ・オブ・カップ

本誌135号でご紹介したとおり、今シーズンから始められた男子のビッグトーナメント15カ国参加による1回戦が終わり、昨春来日したバロンマノ・グラノリエス（スペイン）ら準々決勝進出の8クラブが決まった。

このトーナメントにも、イスラエルからマルコビッツ、カロジニゴス、バラクらを主力としたハポエル・ラマツガンが参加していたが、マルセイユ・UC(フランス)に13―16、14―15で敗れている。

近畿実業団リーグ

湧永薬品が順当の5連勝

5年目を迎えた近畿実業団選手権は、まず昨年11月15日から29日までの4日間6チームが参加して2部リーグが行われ川崎重工（兵庫）が優勝。

同チームと前年までの上位5チームの6チームによって11月15日から12月6日までの6日間、1部リーグが行われた。

その結果、日本実業団リーグ(6月)2位の湧永薬品（大阪）が、順当に勝星を重ね5戦全勝、第1回以来、不敗の5連勝を飾った。

主会場は、1、2部とも大阪市中央体育館。

▽1部

大山商会（大阪） 23（11－6、12－9）15 大阪ガス（大阪）
丸善石油（和歌山） 15（7－5、8－8）13 大山商会
湧永薬品（大阪） 30（16－2、14－8）10 大阪ガス
神戸製鋼（兵庫） 18（11－9、7－6）15 丸善石油下津
湧永薬品 32（18－3、14－3）6 神戸製鋼
丸善石油下津 21（11－9、10－7）16 川崎重工（兵庫）
湧永薬品 30（10－5、20－4）9 川崎重工
丸善石油下津 20（11－2、9－5）7 大阪ガス
大山商会 18（10－6、8－5）11 川崎重工
神戸製鋼 17（7－4、10－4）8 大阪ガス
湧永薬品 19（12－7、7－4）11 大山商会
神戸製鋼 15（3－4、12－7）11 川崎重工
川崎重工 20（13－8、7－9）17 大阪ガス
神戸製鋼 12（4－7、8－4）11 大山商会
湧永薬品 29（14－5、15－6）11 丸善石油下津

【順位】①湧永薬品5戦全勝②神戸製鋼所4勝1敗③丸善石油下津3勝2敗④大山商会2勝3敗⑤川崎重工1勝4敗⑥大阪ガス5敗

2部は川崎重工勝つ

▽2部

川崎重工（兵庫） 15－13 京都信用金庫（京都）
三井造船（大阪） 19－13 鐘渕化学（兵庫）
日鉄建材（大阪） 16－13 鐘渕化学
川崎重工 20－19 美津濃（大阪）
日鉄建材 20－9 三井造船
京都信用金庫 22－10 美津濃
川崎重工 17－15 日鉄建材
鐘渕化学 13－11 美津濃
京都信用金庫 18－10 三井造船
日鉄建材 不戦勝 美津濃
鐘渕化学 16－12 京都信用金庫
川崎重工 30－7 三井造船
日鉄建材 不戦勝 京都信用金庫
川崎重工 18－12 鐘渕化学
三井造船 18－13 美津濃

【順位】①川崎重工5戦全勝（＝1部へ昇格）②日鉄建材4勝1敗③京都信用金庫・鐘渕化学・三井造船2勝3敗⑥美津濃5敗

復活の関東実業団

東京重機、三井石油化学降す

全国実業団トーナメント（2月8～11日・舞鶴）の関東地区代表決定戦を兼ねた復活第1回関東実業団選手権～男子のみ～が、12月14日、千葉県市原市の三井石油化学体育館で行われ、東京重機(東京)が、ホームコートの三井石油化学を押し切り初優勝した。

関東実業団選手権は、43年度から45年度までの3回行われているが、構想を新たにして5年ぶりに復活したもの。

▽第1ラウンド

大成プレハブ（東京） 18（10－6、8－6）12 日本鋼管京浜（神奈川）
東京重機（東京） 22（9－5、13－4）9 安田生命（東京）
三井石油化学（千葉） 22（13－6、9－8）14 原子力研究所（茨城）

丸善石油(千葉)×荏原製作所（東京）は両チーム棄権で不成立。

▽決勝リーグ

東京重機 棄権 大成プレハブ
三井石油化学 棄権 大成プレハブ
東京重機 24（15－8、9－8）16 三井石油化学

【順位】①東京重機②三井石油化学③大成プレハブ＝いずれも全国実業団トーナメントへ。

（注）以上の3チームのほか、関東地区代表2チームを安田生命、原子力研究所、日本鋼管京浜のリーグ戦（4～6位決定戦）で選ぶ予定だったが、日本鋼管京浜の棄権により、他の2チームが代表権を獲得。

中京、17度目の優勝

東海学生秋季リーグ女子

東海学生女子秋季リーグ戦は昨秋（10月10日～26日）4大学が参加して名大球技場で行われ、中京×中京女の争いから、中京が2－1という僅少差で勝ち、春の雪じょくを遂げた。中京の優勝は2シーズンぶり17度目。（男子は既報）

中京 11（6－2、5－3）5 岐阜大
中京女 9（6－1、3－7）8 愛知教大
中京 8（3－4、5－3）7 愛知教大
中京女 9（4－2、5－2）4 岐阜大
愛知教大 6（1－3、5－2）5 岐阜大
中京 2（1－1、1－0）1 中京女

【順位】①中京3戦全勝②中京女2勝1敗③愛知教大1勝2敗④岐阜大3敗

▼東海学生男子秋季1・2部入れ替え戦（11月23日、岐阜大）

岐阜大（1部⑤） 13（5－4、8－5）9 愛大豊橋（2部②）
滋賀大（2部①） 10（4－3、4－5、1－1、1－0）9 名古屋工大（1部⑥）

名城と愛知教大B優勝

第16回愛知学生選手権は昨年11月26日から12月5日までの6日間名古屋市体育館を中心に男女8校21チーム、女子4校7チームが参加トーナメント法式で行われ、男子は名城、女子は愛知教大Bが勝った。

▽男子3位決定戦

中京 22－18 中京B

▽同決勝

名城 16（9－6、7－6）12 名城B

▽女子決勝

愛知教大B 11（7－3、4－5）8 中京女

入り乱れる古豪、新鋭32チーム

8日から舞鶴市で　全国実業団トーナメント

第7回全国実業団（男子）トーナメント～第16回全日本実業団選手権トーナメントの部～は、2月8日から11日までの4日間、京都府舞鶴市体育館を主会場に、32チームが参加して行われる。

今年から、これまでのフリー参加を廃め、ブロック（4地域）推せん制を採用、充実を企てている。

前回1、2位の日新製鋼呉（広島）と三陽商会（東京）が、日本実業団リーグで健斗したのをみても全国的なレベルアップをうかがわせ、また、初出場の日鉄建材（大阪）のように、主戦メンバーが揃って19才といった若い人材の登場も目立つ。

大同製鋼などリーグ勢は規定により、参加しないが、活気のある大会になりそうだ。

頭抜けたチーム見当らず

それだけに優勝争いを占うとなると例年よりいちだんと難しい。

頭抜けた実力を誇るチームはなく、チーム側も「優勝」などと高望みをせず「ともかく第1戦に勝つこと」「ベストエイトに進めれば……」といった控え目な目標を立てているところが多い。

そのなかで、有力とみられているのは、神戸製鋼（兵庫）、丸善石油下津（和歌山）、大山商会（大阪）の近畿勢を筆頭にトヨタ車体、新日鉄名古屋の愛知両チーム、関東予選1位の東京重機（東京）、金沢市役所（石川）、セントラル自動車（神奈川）あたりだ。

大山商会は3年前の優勝チーム　セントラル自動車は、つねにベストエイトへ進出、2位2回、4位1回の実績をもつ。

2回戦に予想されるセントラル×神戸製鋼が、優勝争いの一つのヤマ。

このほか、古い球史を誇る住友化学菊本（愛媛）、王者・大同の弟チーム、大同製鋼高蔵（愛知）、ベテランを揃えたヨ本発条（神奈川）、安田生命、大成プレハブ（ともに東京）、丸善石油松山（愛知）、北陸電力（福井）、三井石油化学千葉、ヨ本鋼管福山（広島）なども、攻守のバランスがとれた好チームである。

前々回3位の二和家具（岐阜）も浮上を狙う。

自衛隊勢では、参加選手のなかで唯一人のオリンピック候補・平野をもつ海上下総（千葉）に注目が集まろう。地元・海上舞鶴（京都）も初出場ながら上位を狙っている。

なお、例年上位2チームは、日本実業団リーグの下位と入れ替え戦を行っているが、今回は日本リーグがらみとあって、はっきりとした線は打ち出されていない。

また、各県にほとんど実業団が出揃ったと伝えられる九州地域から、一チームの参加もなかったのは淋しいことである。

海上自衛隊舞鶴（京都）
日本原子力研究所（茨城）
I・H・I呉造船（広島）
金沢市役所（石川）
大阪ガス（大阪）
北陸電力福井（福井）
鐘淵化学（兵庫）
自衛隊勝田（茨城）
東京重機工業（東京）
丸善石油松山（愛媛）
日鉄建材（大阪）
トヨタ車体（愛知）
安田生命（東京）
三菱油化（三重）
武田薬品光（山口）
大山商会（大阪）
セントラル自動車（神奈川）
二和家具（岐阜）
日本石油（山口）
神戸製鋼（兵庫）
海上自衛隊下総（千葉）
大同製鋼高蔵（愛知）
大成プレハブ（東京）
住友化学菊本（愛媛）
日本発条（神奈川）
日本鋼管福山（広島）
三井石油化学千葉（千葉）
丸菱石油下津（和歌山）
新日本製鉄名古屋（愛知）
川崎重工（兵庫）
三井石油化学（山口）
京都信用金庫（京都）

24日から海上自衛隊全国大会

第3回海上自衛隊ハンドボール全国大会が2月24日から26日までの3日間、鹿児島県・鹿屋市体育館に18チームが参加して開かれる。

海上自衛隊で隊員の体力向上にハンドボールが導入されてはや10年となり、航空部隊各地方隊の大会が毎年行われこの全国大会は隔年開催。49年の第2回大会（本誌116、117号参照）をしのぐ活況が予想される。

今回の大きな特色は、各チームの編成単位を、各部隊の編成（大部隊、小部隊）とし人員を平均化したことである。

そのため、山口県内の岩国と小月が連合するかと思えば千葉の館山と徳島が合体するなど海上自衛隊ならではの〝整理統合〟がみられている。

組み合わせの抽せんが終っていないため、覇権の行方を占うのは難しいが、中心とみられるのは、今シーズン一段の進境を示した下総（千葉・全日本自衛隊選手権優勝）と過去2回の優勝を誇る鹿屋（鹿児島）・沖縄連合の両チームだろう。

このほか、古豪・佐世保（長崎）の巻き返し、前回3位の第2護衛隊群、明年の地元国体を控え練習量充分といわれる前4回位の大湊（青森）らも上位を狙う力がある。

また、初参加の舞鶴（京都）は昨年まで下総を指導していた本田氏を転勤で迎えチームの力をあげており、鹿屋2連勝の原動力となったGK中薗を加えている館山・徳島連合も侮れない。

【田村幸雄】

◇参加チーム＝横須賀（神奈川）呉（広島）、佐世保（長崎）舞鶴（京都）、大湊（青森）各地方隊、厚木（神奈川）、八戸（青森）、下総（千葉）、江田島（広島）、「岩国・小月連合」「館山・徳島連合」「鹿屋・沖縄連合」「1・2潜水隊群」「1・2掃海隊群」、1、2、3、4各護衛隊群。

全日本自衛隊は6月

全日本自衛隊連盟は、第8回全日本自衛隊選手権を、今夏6月9日から13日まで、東京・駒沢球技場を主会場に行う、と発表した。

また、「日本リーグ」に対しては自衛隊球界内のレベルアップ、普及を優先させる、として、当分の間は消極的な姿勢で臨むとしている。

各地の記録

京都クが4年連続優勝

第6回近畿クラブ選手権は、全日本総合選手権全国社会人西地区代表戦に活出場する近畿代表権をかけて、昨年11月16日、大阪市中央体育館に滋賀、和歌山を除く4県の代表が参加して行われ、京都クがエース福井の活躍で都島工ク（大阪）を破り、4年連続優勝を飾った。また、今年からC登録部門と女子部門も始められ、ぼんちフエローズ（大阪）と寝屋川ク（大阪）が勝った。

▽1回戦
都島工ク（大阪） 15（10—9、5—1）10 生駒ク（奈良）
京都ク（京都） 29（17—4、12—5）9 モンシエル・ク（兵庫）
▽決勝
京都ク 22（11—7、11—9）16 都島工ク
▽C登録決勝
ぼんちフエローズ（大阪） 28（13—9、15—6）15 桜陵ク（兵庫）
▽女子決勝
寝屋川ク（大阪） 23（14—3、9—0）3 兵庫ク（兵庫）

中大、2年ぶりで制覇

女子も重機が3年ぶり

第13回東京選手権は、男女トップチームが参加して昨年11月4日から30日まで法大グランドなどでトーナメント法式で行われ、男子は、学生チャンピオンの中大が、三景、大崎電気（埼玉）など実業団の強豪を制し、2年ぶり2度目の優勝を飾った。

女子は、予想どおり東京重機がまとまりのある攻守で、3年ぶり4度目の優勝を遂げた。

▽男子3回戦（8試合）
三景 23—14 日大
中大 棄権 芝浦工大
早大 24—16 東京重機
日体大 27—20 日体大C
三陽商会 37—5 荏原製作所
大崎電気 25—6 日体大B
東京教員（埼玉） 29—12 聖ポール
法大 21—11 稲門ク
▽同準々決勝
三景 24—16 早大
中大 18—16 日体大
三陽商会 17—13 東京教員
大崎電気 22—17 法大
▽同準決勝
中大 26—21 大崎電気
三景 19—11 三陽商会
▽同3位決定戦
大崎電気 20—10 三陽商会
▽同決勝
中大 24（13—9、11—10）19 三景
▽女子準決勝
東女体大 12—6 日体大
東京重機 7—4 大崎電気（埼玉）
▽同3位決定戦
日体大 9—6 大崎電気
▽同決勝
東京重機 14（9—4、5—2）6 東女体大

泉丘会、小林商とも2連勝

▼第12回宮崎県総合選手権（11月 小林市体育館）
▽男子2回戦（6試合）
小林工高 15—12 諸塚青年
都城商OB 29—15 都城工専
宮崎教員 29—21 旭化成
都城工高 9—8 日南工高
宮崎工高 10—7 西都商高
宮崎大 20—15 延岡高
▽同準々決勝
泉丘会 15—7 小林工高
宮崎教員 17—14 都城商OB
宮崎ク 15—11 都城工高
宮崎大 20—11 宮崎工高
▽同準決勝
泉丘会 25—14 宮崎教員
宮崎大 19（分）19 宮崎ク
PTコンテスト3—2で宮崎大の勝ち
▽同決勝
泉丘会 29（14—9、15—6）15 宮崎大
泉丘会（泉ケ丘高OB）は2連勝
▽女子1回戦（1試合）
小林商高 27—4 日南振徳高
▽同準々決勝
泉ケ丘高 22—0 本庄高
都城西高 8—5 延岡高
小林商高 14—3 泉友会
西都商高 10—7 都城商
▽同準決勝
泉ケ丘高 9—6 都城西高
小林商高 18—5 西都商高
▽同決勝
小林商高 15（6—3、9—1）4 泉ケ丘高
小林商高は2連勝

三重教員と田村紡

▼第26回三重県総合選手権（11月 津女高）
▽男子2回戦（7試合）
桑名西高 17—8 鈴鹿工専
本田技研 25—6 津工高
本田技研B 45—9 四日市高
三重大 14—11 日本合成ゴム
四日市工高 16—14 鳥羽商船
三菱油化 17—8 半田ク
教員OB 25—15 三重大B
▽同準々決勝
四日市工高 25—8 三重大
桑名西高 棄権 本田技研
教員OB 13—10 三菱油化
三重教員 棄権 本田技研B
▽同準決勝
三重教員 17—8 桑名西高
教員OB 15—14 四日市工高
▽同決勝
三重教員 26（12—8、14—5）13 教員OB
▽女子1回戦（6試合）
暁高 5—2 菰野高
津女高B 9—7 亀山高
津女高OG・B 15—13 四日市商高
田村紡OG 14—2 上野商高
四日市高B 14—2 津女高OG
暁高OG 4—3 津女高
▽同準々決勝
田村紡 25—0 暁高
津女高OG・B 8（延）7 津女高B
田村紡OG 7—4 四日市高
暁高OG 10—3 四日市高B
▽同準決勝
田村紡 20—4 津女高OG・B
暁高OG 棄権 田村紡OG
▽同決勝
田村紡 19（10—3、9—2）5 暁高OG

田村紡OGおとろえぬ個人技

□……女子でベスト4に進出した田村紡OGは、往年の名手がズラリ。「練習不足」でさすがに、かつて全国のファンをうならせた俊足とクイックプレーは鈍ったが、個々のテクニックは抜群。高校選手も目をみはっていた。

最終日は、それぞれ家庭の都合でメンバーが揃わず、惜しくも棄権となったが、選手側も、主催者側も「来年の出場」を待望……。（中根）

（田村紡OG）▽GK南（旧姓・

渡辺美）▽ＦＰ川口、寺島（内藤）、坪井（小林）、石川（渡辺好）、渡辺（種村）、木田（清水）、渡辺信、金田、久保田

小松工、３年連続成る

▼石川県高校新人大会（11月、小松市体育館）

▽男子準々決勝
小松商 16―11 泉丘
金沢市工 13―8 羽咋
県工 18―17 大谷
小松工 13―12 寺井
▽同準決勝
小松商 15―6 金沢市工
小松工 16（延）11 県工
▽同決勝
小松工 20（7―7、13―4）11 小松商
▽女子準々決勝
松任 13―12 小松商
大谷 23―0 短大高
星稜 4（延）3 津幡
金沢商 13―3 宝達
▽同準決勝
大谷 14―0 星稜
松任 7―6 金沢商
▽同決勝
大谷 10（6―0、4―0）0 松任
（注）小松市女（全日本高校1位）は不出場

名古屋市工が進出

▼愛知県高校新人大会（11月、岡崎北高）

▽男子準々決勝
名古屋市工 12―11 名古屋市工芸
中京 18―13 春日井
豊橋工 11―9 岡崎
桜台 6―5 愛知
▽同準決勝
名古屋市工 13―6 中京
豊橋工 14―11 桜台
▽同3位決定戦
桜台 11―9 中京
▽同決勝
名古屋市工 17（9―4、8―4）8 豊橋工
▽女子準々決勝
名古屋商 6―4 若宮商
市邨 14―9 岡崎
緑ケ丘商 8―6 蒲郡東
岩津 15―3 一宮
▽同準決勝
市邨 16―7 名古屋商
岩津 14―3 緑ケ丘商
▽同3位決定戦
名古屋商 10―4 緑ケ丘商
▽同決勝
市邨 8（5―1、3―3）4 岩津

▼第9回沖縄県総合選手権（11月・沖縄高）

▽男子準々決勝
沖縄国際大 22―12 小禄ＯＢ
琉球大 20―5 北山高
大知会 13―4 那覇商高
沖縄教員 32―15 浦添高
▽同準決勝
沖縄教員 19―13 琉球大
大知会 13―9 沖縄国際大
▽同決勝
沖縄教員 17（9―5、8―4）9 大知会
▽女子準々決勝
小禄ＯＧ 18―10 前原高
浦添高 11―5 中部商高
コザ高 8―2 首里高
興南高 9―4 沖縄国際大
▽同準決勝
浦添高 9―4 小禄ＯＧ
興南高 7―2 コザ高
▽同決勝
興南高 9（6―3、3―1）4 浦添高

▼第10回佐賀県室内選手権（12月、佐賀県立体育館）

▽男子準々決勝
佐賀教員 31―9 相知ク
神埼ク 15―13 佐賀商ＯＢ
県高校選抜 11―8 白石ク
ブリヂストン鳥栖 19―10 自衛隊目達原
▽同準決勝
佐賀教員 13―12 神埼ク
ブリヂストン鳥栖 6（分）6 県高校選抜
ＰＴコンテストでＢＳ鳥栖の勝ち
▽同決勝
佐賀教員 11（4―5、7―3）8 ブリヂストン鳥栖
▽女子1回戦（1試合）
県高校選抜 13―2 甲斐愛球会
▽同準決勝
神埼ク 3―0 県高校選抜
神埼農高3年 7―5 佐賀女ＯＧ
▽同決勝
神埼ク 6（3―1、3―4）5 神埼農高3年

盛岡市役所が初優勝

▼第1回盛岡市（岩手）社会人リーグ（6月〜11月・盛岡）

岩手日報　16—12　岩手フェザント
盛岡市役所　13—12　山王ク
県職ク　34—9　石桜ク
岩手トヨペット　16—11　白亜百星
山王ク　18—15　岩手フェザント
盛岡市役所　15—9　岩手日報
県職ク　17—16　白亜百星
県職ク　9—6　岩手トヨペット
岩手フェザント　28—15　石桜ク
山王ク　15—12　県職ク
盛岡市役所　22—13　石桜ク
岩手日報　14—11　白亜百星
岩手トヨペット　18—10　岩手フェザ
盛岡市役所　16（分）16　県職ク
岩手日報　不戦勝　山王ク
山王ク　17—13　岩手トヨペット
石桜ク　10（分）10　岩手日報
白亜百星　24—15　岩手フェザント
山王ク　27—8　石桜ク
盛岡市役所　19—12　白亜百星
県職ク　12—9　岩手日報
石桜ク　12—11　白亜百星
岩手トヨペット　15—11　岩手日報
岩手フェザント　15—11　県職ク
山王ク　21—11　白亜百星
盛岡市役所　15—9　岩手トヨペット
岩手トヨペット　15—7　石桜ク
盛岡市役所　26—19　岩手フェザント

【順位】①盛岡市役所6勝1分②山王ク5勝2敗③県職ク4勝1分2敗④岩手トヨペット4勝3敗⑤岩手日報3勝1分3敗⑥岩手フェザント・ク2勝5敗⑦石桜ク1勝1分5敗⑧白亜百星1勝6敗

下関中央工、岩国工破る

▼山口県高校トーナメント（11月岩国工高）

▽男子準々決勝
岩国工　13—11　下関一
下関中央工　31—9　山口
宇部工　9—8　下松工
岩国　24—4　防府商

▽同準決勝
下関中央工　14—8　岩国工
岩国　20—3　宇部工

▽同決勝
下関中央工　13（7—7、6—4）11　岩国

▽女子準々決勝
岩国商　14—3　宇部女
田部　9—3　防府商
徳山　10—7　高木
山口中央　8—2　岩国

▽同準決勝
岩国商　9—4　田部
徳山　11—6　山口中央

▽同決勝
徳山　7（5—4、2—1）5　岩国商

女子で仁愛が勝つ

▼福井県高校新人大会（11月、敦賀市立体育館）

▽男子決勝トーナメント1回戦（2試合）
若狭　15—4　武生商
高志　15—7　武生

▽同準決勝
若狭　11—6　藤島
羽水　18—8　高志

▽同決勝
若狭　12（6—7、6—1）8　羽水

▽女子決勝トーナメント1回戦
仁愛女子　6—4　武生商
高志　12—8　藤島

▽同決勝
仁愛女子　12（5—3、7—3）6　高志

男女とも三本松強味

▼香川県下高校新人大会（11月・高松工芸高）

▽男子決勝リーグ
三本松　21—4　高松南
高松工芸　10—6　高松一
三本松　15—5　高松一
高松工芸　15—6　高松南
高松一　9—6　高松南
三本松　11—9　高松工芸

【順位】①三本松②高松工芸③高松一④高松南

▽女子1回戦（2試合）
三本松　11—2　高松中央
高松一　19—2　高松商

▽同準決勝
三本松　10—4　高松
高松一　8—5　高松南

▽同決勝
三本松　9（3—2、6—2）4　高松一

岡山女子は金川制す

▼第30回岡山県高校新人大会（11月、津山商高）

▽女子準々決勝
西大寺　7—6　操山
津山商　8—3　津山
青陵　4（分）4　真備
PTコンテスト2—1で青陵の勝
金川　6—1　大安寺

▽同準決勝
津山商　10—4　西大寺
金川　10—1　青陵

▽同決勝
金川　4（2—2、2—1）3　津山商

▽男子準々決勝
天城　11—10　児島
邑久　11—6　金川
岡山工　12—5　芳泉
倉敷工　13—6　水島工

▽同準決勝
天城　12—11　邑久
倉敷工　25—4　岡山工

▽同決勝
倉敷工　19（6—7、13—4）11　天城

旧田村紡勢で新チーム

【速報】昨年末、部活動の休止を発表した女子・田村紡(三重)〜本誌29頁参照〜の主力選手10人が、大手スーパー「ジャスコ」に移り、今春4月から新チームを結成することが、1月22日明きらかにされた。

★編集後記

□……オリンピックイヤーが明け、最初の本誌をお届けします
　半年後、モントリオールに男女両チームが揃って登場することを期待——というよりも確信したいものです。
□……昨年末、各報道機関の年間回顧で、女子ハンドボールの密室試合が、異常なできごととして堀りかえされました。
　競技以外のことで、あまりにも問題が多い昨今の日本ハンドボール界です。
　今年は、コート上の明かるい話題が続出しますように。
（杉山）

□……早いものでこの仕事を始めて半年が過ぎてしまいました
　唯一のハンドボール誌として私の小さい頃からずっと発行されてきた機関誌。
　私などまだハンドボールの「ハ」の字もわからない状態ですハンドボール誌が一冊というのは悲しいことですが、それだけに新年を迎え新たな気持ちで機関誌の内容をもっともっと多彩なものにしたいと思っています。どこまでできるかわかりませんが頑張ります。
　みなさんからの御意見をたくさんお待ちしています。
（青木）

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第一三八号
昭和四十年六月七日第三種郵便物認可
昭和五一年一月二十五日印刷 昭和五一年二月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東[illegible]谷区神南一ー一ー一
電話 大代表(467)三二一一
振替 東京五八三四八番
編集兼発行人 荒川清美
定価二百五十円（年間購読料二千五百円）